
魔法使いになりたいから

椰子カナタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法使いになりたいから

【Nコード】

N5097Z

【作者名】

椰子カナタ

【あらすじ】

アンティークショップ『螺旋の環』。ここに住む高校三年生、風代朔羅は、転校生・鞘上絹枝と出会う。共に『螺旋の環』で暮らす事になった彼女たちの織り成す現代ファンタジー。『IRIS / RAGNAROK』のスピノフ外伝。pixivで連載中の作品を随時転載中です。

プロローグ

身体が熱い。

片目がズキリと痛む。

痛めば痛むほど、体は焼けるように熱を帯びていく。

地下通路を歩く彼女の足取りは酷く重かった。身体を引きずるように、壁に肩を預けながら懸命に歩き続けている。痛みに顔をしかめ、息を切らせながら歩く。

それもその筈だ。彼女の着ている衣服は既にぼろぼろで、それどころか全身が傷だらけであった。幸い出血量は少ないようだが、それでも傷口から流れる血が、彼女の歩いてきた道の上に間を置きながらも落ちていく。

もう体力も限界を迎えていた。それでも歩き続けるのは一体何の為だったろうか。朦朧とする意識の中ではそれすらおぼろげだった。身体が熱い。

片目の痛みは増していく。ズキリと響く鼓動のような痛みは、やがてキリキリと鍼か何かで抉られるような痛みに変わっていく。

ここまで痛むのは彼女にとっても初めての経験だった。痛むのはもはや目だけでは済まない。彼女の中に流れ込んでくる暴力的な何かが彼女の心を痛めつけていく。

その目は、そういう類の代物だった。

「ッ！！」

声にならない悲鳴を上げて彼女は蹲るようにその場に倒れ込んでしまった。

誰もいない。昏い地下通路に彼女以外の姿はない。彼女を救助できるような者はどこにもいなかった。

だが彼女にはもう、立ち上がるだけの力は残されていない。痛みの中、彼女の意識は薄れていく。

私、死ぬの、かな。

だが忽然として、彼女の前に現れた人影があつた。もはや衰弱しきつた彼女がそれに気付いたかどうかは定かではないが、その人影はまるで彼女がこんな状態になるまで登場を控えていたかのようなタイミングで現れた。

彼女を見下ろす人影の表情は窺い知れない。口を開いて呟いたのはたつたの一言だつた。

「死なせはしないさ」

その声は彼女に聞こえたかどうか。

意識を失う間際、最後に思い浮かべたのはたつたひとりの妹の姿だつた。

第一話 転校生は同居人

1 .

「ほら、行くわよ朔羅」

アンティークショップの看板を掲げた『螺旋の環』店内には、所狭しと骨董品が並べられている。

鏡や置物、果ては屏風などといったラインナップは古今東西の骨董品を網羅していると言つていいだろう。この四月に高校三年生になったばかりの風代朔羅には、それらがどれだけの値打ち物なのかさっぱり分からないのだが。

「それじゃ、行ってくるね。みゆう」

店の奥に鎮座するカウンターの上に、一匹の黒猫が寝転がっていた。みゆう、というのは彼の名前だ。朔羅が名付けた。飼い主である筈の『螺旋の環』オーナー、柊蘭が好きに呼ぶといいと言ったので、その鳴き声からとったのだ。

みゆうの頭を撫でて、朔羅は骨董品の間を縫うように入口へ向かう。ドアの前で彼女を待っていた穂叢なぎさは、朔羅が隣に並ぶと彼女と共に店を後にした。ドアを閉めると、吊り下げ型の看板が揺れる。

『螺旋の環』。古風な造りの洋館はそれそのものがアンティークのようで、この辺りではちよつとした名物になっている建物だ。朔羅となぎさにとっては幼い頃から暮らしている家でもある。彼女らに既に親はない。ここの前オーナーであった赤羽サツキによって拾われ、彼女を親代わりに育ててきたのだ。

お陰で朔羅となぎさ、二人は姉妹のように仲がいい。同い年で、今も同じ高校に通う二人は共に生徒会の役員を務めているなど一緒にいる時間は長い。

こうして登校を共にするのも毎朝の事だ。時に日直などの用事で

どちらかが早めに家を出る事もあるが、そういった例外を除けばいつもと変わらぬ登校風景がそこにあった。

「転校生ってどんな子かな？ 楽しみだよ」

「朔羅は隣の席よね。ちゃんと仲良くしなさいよ」

「む、分かってますよーだ」

今日は彼女たちのクラスに転校生がやってくると聞いていた。分かっているのは女子生徒であることと朔羅の隣の席になる事だけだった。先日転校生の為の机を用意するのを手伝った朔羅は、新しい出会いを待ちきれない様子である。

「あ、あれ水輝君じゃない？」

朔羅は数十メートル先の交差点で、信号待ちをしている一人の男子生徒を見つけた。彼女らと同じ学校の制服に身を包んだ彼の容姿は遠目に見てもとても目立つものであった。日本人らしからぬ金髪に碧眼、肌は白く、顔立ちも日本人離れている。月島水輝。日本人とフランス人のハーフである彼は、朔羅たちの一学年下に当たる後輩で、同じ生徒会役員でもある。

「水輝くん！」

「朔羅、危ないわよ。……もう」

水輝に向けて手を振って駆け出した朔羅に、なぎさは後ろから注意を促すも聞き入れられる事はなかった。いつもの事なので諦めるのも早い。

なぎさが制止をかけたのはもちろん、朔羅の気質故だ。案の定、朔羅は途中で何かに躓いて体勢を崩す。

「わわちよっ」

その場に倒れかかったところで、間髪誰かがその手を取った。朔羅の対面から歩いてきていた通行人の男性だった。短髪に凜々しい顔立ち、銜え煙草をしたスーツ姿の男だ。歳は三十半ばから後半といったところだろうか。

男性は顔を上げた朔羅に、どこか不敵な笑みを投げる。

「大丈夫かい、お嬢ちゃん。足元には気を付けた方がいいぜ」

「あ、は、はい。ありがとうございます！」

「よし、いい子だ。ほら、ちゃんとお姉ちゃんに学校まで送ってもらうんだぞ」

歩み寄り、頭を下げたなぎさに朔羅を預け、男性は去っていった。煙草のフレーバーの匂いが離れていく。

「おはようございます、風代先輩、穂叢先輩」

朔羅たちに気付いた水輝が、こちらへ道を戻ってきていた。なぎさは挨拶を返したものの、朔羅は俯いたまま動かない。

「風代先輩？」

水輝が声をかけると、朔羅は大きく腕を広げて声を上げた。

「私、高校生だもん！」

2 .

「転校生を紹介する。鞘上絹枝だ。君たちと席を共にするのはあと一年だけだが、よろしく頼む」

三年四組担任、雀ヶ森香歩は教卓の傍らに佇む転校生に自己紹介を促した。転校生は黒板に自身の名前を書く。控えめな大きさでそれを書き終えると、彼女はゆっくりと振り返った。

「鞘上絹枝、です。よろしくお願いします」

絹枝は微笑みながらゆっくりと、しかし深々と頭を下げる。長く綺麗な黒髪が前に落ちた。頭を上げ、それを掻き上げる仕草が妙に艶っぽい。雀ヶ森が朔羅の隣の席に着くよう促すと、一步一步、独特のリズムで歩いて着席する。朔羅はこのリズムにどこか違和感を覚えたが、それが何かは分からなかった。

隣の席に座った絹枝へ、朔羅は微笑みかける。

「私、風代朔羅。よろしくね、鞘上さん」

「……風代、さん。うん、よろしくね」

声をかけられた絹枝は一瞬きよんとしていたが、すぐに微笑み

を返してくれた。おっとりした子だな、というのが朔羅が抱いた第一印象だった。

転校生の紹介も終え、雀ヶ森は淡々とホームルームを始める。出席の確認を終え、連絡事項を済ませると肅々とホームルームを終えた。黒板に刻まれた絹枝直筆のサインを指して、「授業が始まるまでに消しておいてくれ」とだけ言い残して教室から去って行った。

ホームルームが終わるや否や、朔羅は立ち上がって絹枝の隣に立つ。

「鞘上さん！」

朔羅の声に教室中が色めき立つ。「よっ、特攻隊長」などという声上がる辺り、このクラスにおける朔羅の立ち位置は既に確立していた。

ちなみに朔羅は立ち上がっているにも関わらず、座っている絹枝とは丁度同じくらいの高さで視線が合うようになっていた。見上げる必要も、見下ろす必要もなく横を向いた絹枝は、どこか見惚れるようにぼう、と朔羅を見つめていた。

朔羅はビシツと手を上げて尋ねる。

「絹枝ちゃんって呼んでいいですか！」

「あ、私も」と他の生徒たちも随時それに続いていく。この勢いに呆気にとられていた絹枝だったが、やがてこくと頷いた。そうしてももの数秒で、絹枝の呼び方は「絹枝ちゃん」で定着していった。

「私の事も朔羅って呼んでねっ！」

やがて絹枝の周囲には朔羅を筆頭に女生徒たちの輪が出来上がる。絹枝への質問攻めは一時間目の英語を担当する教師が現れるまで続いた。

「ほら、転校生と仲良くするのもいいけど、休み時間にしてくれよ」

「はい！」

英語教師の声に、輪に加わっていた生徒たちは順次自分の席へ戻っていく。

朔羅の前の席であるなぎさが絹枝を振り返り、声をかける。

「ごめんなさいね、うるさい子で。私、穂叢なぎさ。この子とは一緒の家で暮らしてるの。よろしく」

「ううん、大丈夫。すごくかわいいなって思ったから。よろしくね、穂叢、さん」

3 .

放課後となり、生徒会の会議を終えた朔羅はなぎさと共に帰路に就いていた。本来なら絹枝とも一緒したかったところなのだが、彼女は「引越しの片付けが終わってないから」と言って先に帰ってしまった。残念だが、そういう事情なら仕方ない。

朔羅たちの学校はゆるやかな坂の上にある。坂の下まで降りてこれば、朝に水輝と会った交差点まで辿り着く。水輝とはそこで分かれ、朔羅たちは『螺旋の環』へと向かって真つすぐに帰っていく。

「桜、散っちゃうねえ」

「そうね。このままだと、四月が終わる前になくなるかもしれないわね」

四月の空に桜の花びらが舞う。短い桜の季節が終われば、春と夏の境目が訪れる。

「あと、一年かあ」

朔羅は眩しそくに桜吹雪を見つめた。あと一年で高校生活も終わりを迎える。朔羅もなぎさも進学を決めていたが、この街からは離れる事になる。卒業すればこれまで一緒だったクラスメイトたちと会える機会はほぼなくなるだろう。

だが朔羅は感傷に浸るわけでもなく、なぎさに笑顔を向けた。

「それじゃあ、めいっぱい楽しまないとねっ」

やがて周囲のベッドタウンから切り離されたかのような佇まいを見せるアンティークショップの看板が見える。『螺旋の環』の入口を潜り、朔羅たちは帰宅した。

「お帰り、二人とも」

二人の姿を確認して声をかけてきたのは、オーナーである柊蘭だ。眼鏡の奥のどこかミステリアスな美貌に静かな微笑が浮かぶ。

「そうだ、よかつたら彼女を手伝ってあげてくれないかな。引つ越しの片付けをしているんだけど、どうやら色々余計なものを渡されてきたようなんだ」

引つ越し。一体何の話だろうか。腑に落ちないながらも何か引つかかるものを感じた二人は、二階への階段を上りだした。『螺旋の環』の二階は居住スペースだ。手前に個人部屋が並び、一番奥にリビングやキッチンといった共有スペースがある。

朔羅となぎさの部屋は一番手前側にあつた。廊下を挟んで向かいになるように配置されている。ここに暮らしているのは今は朔羅、なぎさ、蘭の三人のだが元々宿舎としての役割も兼ねていた建物であつたために部屋の数は多い。

蘭の部屋は共有スペースに最も近い奥の部屋だ。そのため朔羅の隣部屋はもちろん空き部屋であるはずなのだが、今日に限ってはそのドアが開かれ中から物音がする。

「あのー、よかつたらお手伝い……」

朔羅が恐る恐る部屋を覗いてみる。すると彼女は中にいた人物と目を合わせて固まってしまった。なぎさも顔を出す。

「やつぱり、あなただったのね鞘上さん」

「朔羅、ちゃんに穂叢、さん」

絹枝は朔羅となぎさの登場に心底驚いた様子だつた。

誰かが階段を上ってくる音がする。振り返れば蘭がこちらへやってきていた。啞然としている朔羅たちを見て、彼女は呑気にああと得心する。

「そうか、君たちには言っていなかったね。今日から絹枝君もこの『螺旋の環』で暮らす仲間だよ。実は彼女は私たちの師匠、赤羽サツキの娘さんでね。師匠の頼みでここで預かることになったんだ」
「え、む、娘つて、師匠に子供さんがいたんですか!？」

「まあ、そう驚かなくてもいいんじゃないかな。八十を過ぎてもあの身体なんだ。何をしているかは推して知るべし、といったところだよ」

そう言われれば確かに、と朔羅たちは納得する。『螺旋の環』前オナーである赤羽サツキは八十代を自称しているもののその容姿、身体付きは二十代後半から三十代前半辺りで保たれている。明らかに異常な若さだったが、その理由を知る彼女たちは絹枝という確たる存在を前に納得せざるを得ないのだ。

「え、えと」

朔羅は絹枝に向き直る。

「改めて、よろしくね？」

目を見開いて呆然としていた絹枝だったが、その表情はやがて柔和な微笑みに変わる。

「うん、よろしくね」

朔羅となぎさは自室に鞆を置いて、絹枝の手伝いを始めた。ベッドに机、布団に鏡にタンス。妙に多くの家財道具が室内にひしめいていたが、どうやら全て彼女の母たるサツキから渡されたものであるらしい。あれもこれもと必要そうだと思われたものを手当たり次第与えられたのだろう。明らかに部屋の容量を大きく超えていた。

閉店作業を終えた蘭も交え、片付けは部屋に置く物と置かないものの整理へと入っていた。使わないものは空いている部屋を物置代わりに、そちらへ仕舞う事となった。サツキには悪いが、よく考えずにばいばい物を渡したあなたが悪い。以外に親バカなのかなと朔羅は思うのだった。

「お疲れ様、三人とも」

労うとともに、蘭は全員へ紅茶を振る舞った。リビングのテーブルに着いて息を吐く朔羅たちの前に、紅茶の深い香りが漂う。蘭は自身の紅茶に真っ先にミルクを注いだ。イギリス人の祖母を持つクオーターであるところの蘭は、祖母の影響か紅茶は確実にミルクテイー一択だ。

「蘭さん、結構体力あるんですね」

蘭の様子を見て、なぎさが言った。

「そうでもないよ。私は殆ど見ていただけだったからね」

ぐったりとはいかないまでも本当に疲れた様子の高校生三人に対して、蘭は優雅に紅茶を口にしながらケロリとしていた。朔羅からしてみれば別にそんな事はなかった気がするのだが。この人はこの人で結構謎だ。

「では、一休みしたら夕食にしよう。今日は絹枝君の入居祝いだからね、いつもより豪華にしようか」

『螺旋の環』では蘭が食卓を切り盛りしている。といっても、彼女自身はあまり料理が得意という訳ではないのだが。

「あれ、そういえばみゆうは今日はいないんですか？」

朔羅の問いに、蘭は今更気が付いたかのようにああと声を出す。

「今日は朝に出て行った切りだね。まあ、彼は気紛れだから。またいつか戻ってくるよ」

呑気に嘯いて、呑み干したカップを手に蘭はキッチンへ向かった。

第二話 あなたの記憶は

4 .

風代朔羅は魔法使いだ。

「なぎさちゃん、いつくよっ!」

「了解!」

朔羅が蹴り飛ばした犬のような四本足の獣が、逃げ惑うようななごさに突進していく。小型犬と大差のない体躯だが、中身はれっきとした化け物だ。

深夜の公園に人の姿はない。結界によって表の世界から隔絶されたここに一般人の入り込む余地はないのだ。この結界は朔羅たちが用意したもので、魔法使いの戦いには必要不可欠なものだ。人目を気にすることも、被害を気にする必要もなく戦うことができる。

朔羅の声になぎさの手から迸る電撃が鞭のようにうねり、獣型の化け物へ放たれる。雷鞭は化け物の身体に巻き付き、スタンガンのように電撃による衝撃を与えながら捕縛する。

「朔羅!」

「うん!」

朔羅は手にした三日月形の処刑鎌を振りかざして飛び上がる。

「せーのっ!」

気合とともに鎌を振り下ろして、化け物の身体を両断する。生命力を失った化け物は霧のように霧散して消えた。

朔羅は着地して武器である鎌を消す。この鎌はマテリアライズと呼ばれる魔法で武器化した彼女自身の魔力だ。彼女の意志一つで顕現も消失も可能であった。

「よっし! これで今日も任務かんりよ」

「まだよ朔羅」

『みつしよんこんぷりーと』を宣言しようとした朔羅の言葉を遮

つて、なぎさは朔羅の背後に雷鞭をしならせる。

振り向けば、今しがた倒したばかりの化け物と同型のそれが、朔羅に食らい付こうとして飛び掛かってきているところだった。油断していた。残された一匹が、この瞬間を狙って息を潜めていたのだ。なぎさの雷鞭がうねりを上げ、化け物を地面に叩き落とす。

尚も化け物が立ち上がろうとしたところへ、銃声。化け物は銃弾に撃ち貫かれて消えた。

音のした方を見れば、二丁拳銃を手にした水輝がこちらへ爽やかな笑顔を向けていた。

「風代先輩、大丈夫でしたか？」

「うん、ありがとね二人とも」

朔羅が礼を言つと、安堵したように微笑んでくれた水輝とは対照的になぎさは慚然と朔羅を見やる。

「まったく、敵を倒した瞬間に気を抜き過ぎなのよあんたは」

凶星だった。朔羅は「だって……」などと抗議し始めようとしたが、続く言葉が出てこない。

「まあ、いいわ。それは次の任務の課題にしましょう。それで月島君の方は終わったの？」

朔羅たち三人は二手に分かれて任務に当たっていた。一匹一匹は大して手強いわけではなかったが数が多い。包囲されると一番劣勢になりやすい朔羅のサポートになぎさが付く形で、水輝は一人でその包囲網を抜けてきたのだ。

「はい、こちらも全て倒しました。もうこの辺りに魔はいないようですね」

水輝の手から銃が消える。無論、マテリアライズされたもので実銃ではない。彼の持つ風の属性を与えられて具現化されたそれは、魔力を風弾として精製し撃ち出す事のできる代物だ。質量こそ実弾に劣るものの、遥かに早い弾速で容赦なく敵を撃ち貫く威力を持っている。

「それじゃあ改めて、今日も任務完了だね！」

朔羅の宣言に、なぎさと水輝は頷く。「もう、調子いいんだからとなぎさが溜め息交じりに零したが、その表情は優しげだ。

と、そこへ拍手の音と共に蘭が姿を現した。隣には絹枝の姿もある。

「お疲れ様、みんな」

蘭の労いの言葉に朔羅たちは笑みを浮かべる。

『螺旋の環』。表向きにはアンティークショップとして軒を連ねている店舗だが、その本来の姿は魔法使いギルドと呼ぶべきもの一つだ。

世界の裏側には魔と呼ばれる化け物どもが跋扈している。この世の生物を遙かに凌駕する能力を持つそれらに対抗できるのは、同じく人外の力を備えたものたちだけだ。

魔法使いと呼ばれる人種もその中の一つであった。彼らは魔という存在の持つ力を逆に利用する事で力を得た異端で、人の身でありながらも魔と同種の力を持つ。

魔法使いギルドとはそんな彼らの活動拠点として機能する組織だ。『螺旋の環』も無論その役目を持つ。かつて大魔法使いと呼ばれるほどの二人の魔法使いが共同で創設したここには、その伝手を辿って様々な依頼が舞い込んでくる。

今日のこの戦いもその内の一つだ。ただ、近隣に出没する魔を排除してほしいという依頼はそう珍しい物でもない。珍しくはないのだが。

「それにしても、最近は多いですね」

水輝の言葉に朔羅となぎさは辟易したような表情を浮かべた。ここ最近、こうした魔の出没する頻度が日に日に増していた。現れるのは力の弱い低級な魔ばかりだが、連日の戦いで朔羅たちの疲労は確実に蓄積している。このままではいずれ、彼女たちだけでは対抗できない事態に陥ってしまう恐れもあった。

蘭は顎に手を当てて考え込むような仕草を取る。

「うん、やはりお祖父さんがいなくなっただのは大きいか……」

眩くと顔を上げ、朔羅たちと視線を交わす。

「五大英雄の一人、扇空寺辰真が人柱だったという話はしたね。去年、魔の力を弱めていた人柱である彼が亡くなった事で、彼らは確実に力を取り戻し始めているようだね。このままなら力を完全に取り戻した上級の魔が現れるのは明白　そうなるとこの人数ではとても対処しきれない」

50年前、元魔戦争と呼ばれる世界の命運を賭けた戦があった。元魔と呼ばれる遙かに強大な魔の軍勢を率いて、世界を滅ぼそうとした終焉の魔神ラグナロク。それを打ち破った五人の勇者の名は、五大英雄として現代まで称え続けられている。

その内の一人、扇空寺辰真は元魔を封印するための人柱としての身に鍵を宿した。彼が没するその日まで、元魔は次元の彼方に封じられ、世界に蔓延る魔たちは力を弱められる事となったのだ。

弱体化を強いられた魔たちはその身を闇に隠した。怨敵の死を待ち、再び力を取り戻すべく潜み続けた。扇空寺辰真が亡くなったのは一年前の事だ。この時を虎視眈々と狙い続けてきた魔たちが台頭してくる日が近いのを、朔羅たちは充分過ぎるほどに実感していた。「そこで、だけれど」

蘭は絹枝を振り返った。全員の視線がそちらに向かう。

鞘上絹枝。朔羅たちの師であり、『螺旋の環』を創設した一人である大魔法使い赤羽サツキの娘である彼女ももちろん、その血を受け継いだ魔法使いであるのは言うまでもない。

「どうかな、絹枝君。私たちの仕事を手伝ってくれる気はないかい？　師匠からは散々こき使ってくれと言伝されているけれど、私は君の意思を尊重しようと思っているよ」

5 .

「今はまだ、現れる魔を倒しながら方策を練るしかないね。私も知り合いを当たって、色々と手を尽くしてみるよ」

蘭はそう言っただけで解散とした。

『螺旋の環』に帰ってきた朔羅は、自室のベッドの上で思い出す。結局、絹枝の返答は「考えてみます」というものだった。一緒に戦える仲間が増えるものだと思っていた朔羅にとっては残念な答えだったが、かといって無理強いもできない。なにせ魔との戦いは本当に命のやり取りだ。絹枝にどれだけの力があるかは分からないが、戦い慣れている朔羅たちにとっても過酷なものに、今日出会ったばかりのクラスメイトを無理矢理巻き込めるはずもない。

そもそも朔羅たちはまだ修行中の身だ。更に言えば朔羅はなぎさや水輝に比べて出遅れている。今日のようにピンチを招く事も少ない。そんな朔羅と一緒に戦おうと言えば、自分の身は自分で守れと言っているようなものだ。朔羅から誘うのは難しい。

「鞘上絹枝ちゃん、か……」

朔羅は思い直す。それよりも彼女とはまだ今日が初対面なのだ。まずは普通の友達として。仲良くできたらなと思う。

ガラツ、と隣の部屋で窓の開く音がした。ベランダに足音が響く。絹枝ちゃん？ と朔羅は起き上がってみた。四月も半ばだがまだ夜は寒い。深夜を回っている今、夜風に当たるのは身体に悪い。声をかけてあげないと、と朔羅も窓を開けてベランダに出る。

「朔羅、ちゃん」

個室のベランダは繋がっているの、朔羅は絹枝の元へ歩み寄る事ができた。

対して絹枝は、心配そうに朔羅を見つめている。

「風邪、引いちゃうよ」

絹枝の言葉に朔羅は苦笑した。

「それ私が言おうとしたんだけどなあ」

「ありがとう。でも私、大丈夫だから」

絹枝は手摺りに手を置いて、夜の街に視線を向ける。何の変哲もない寝静まったベッドタウンがそこに佇んでいる。

「眠れなくて。ちょっと夜風、当たりたくなつて」

ぼんやりと、しかしどこか初めて見るものに対しての憧憬のようなものを秘めた眼差しで、絹枝は街を見つめていた。

「珍しいかな、こういうところ」

え、と絹枝は朔羅に視線を戻した。しばし呆けたように目を瞬いた後、再び街並みを眺めて答える。

「ううん。……ただ、私、初めてなの」

絹枝の言う初めての真意が朔羅には分からなかったが、きっと今まで絹枝が住んでいたのはとんでもなく都会か、のどかな田舎かどちらかなのだろうなと朔羅は思った。

「絹枝ちゃんがここに来る前はどんなところにいたの？」

「どんな……」

絹枝は夜空を見上げた。遠い故郷に思いを馳せるかのように、ゆっくりと語り始める。

「森、だった。広いけど、囲まれてて他に何も無いような場所。ここみたいに賑やかじゃないけど、みんながいたから楽しかった」

その頬を一筋の線が伝った。あまりに自然に流れたそれに、朔羅は驚く事もできずにただ彼女を見つめていた。

絹枝は顔を抑えてそれを拭った。きつと友達の事を思い出したのだろう。

「ごめんね、急に。……朔羅、ちゃんは、ここに来る前どうしてたの？」

今度は朔羅が夜空を見上げた。

「私ね、ここに来る前のことよく覚えてないんだ。気付いたら師匠がいて、なぎさちゃんがいて、蘭さんがいたの。ここに来た時私は小学生だったんだけど、それまで何をしてたか全然覚えてなくて」

小学五年生だったらしい朔羅は、突然何もかも知らないものに囲まれた生活が始まった。それでも今日までこうしてこられたのは『螺旋の環』のみんなのお陰だった。

「でも私、全然気にしてないよ！ 別に思い出したいとも思わないし、今一緒にいるみんなが好きだから」

だから、と朔羅は絹枝に向けて笑みを作る。

「絹枝ちゃんとも、仲良くしたいなっ」

絹枝は不意を突かれたかのように朔羅を見やった。だが朔羅が笑みを向ける内にやがて、その顔に微笑みが浮かぶ。

「うん。私、も、仲良くしたいよ」

尚も絹枝の頬を伝う涙は、しかし先ほどとは別のものだろう。朔羅にはそう見えた。

「よろしくね、絹枝ちゃん」

「こちらこそよろしく、朔羅、ちゃ」

ぐっ、と呻き声を上げて絹枝は突然右目を抑えて蹲ってしまった。絹枝ちゃん!？」

「ッ!?!」

苦悶の表情を浮かべる絹枝の額には汗がにじんでいた。相当辛そうだ。朔羅は彼女を抱きかかえて部屋に戻ろうと、絹枝の肩に触れる。

「朔羅、ちゃん……。あなた、の記憶、は」

だが朔羅が絹枝を支える前に、彼女は気を失ってしまった。倒れかかる身体を何とか抱き留めたものの、朔羅の頭からは絹枝が言いかけた言葉が気になって離れなかった。

部屋に運んだ絹枝の身体はベッドに寝かせた。既に安定した眠りに就いてはいるが、彼女を見つめる朔羅の表情は重かった。

「彼女の右目、どうやら師匠と同じ千里眼のようだね。まだ制御ができていないんだろう。気が緩んだ瞬間に何かを見てしまったんじゃないかな」

絹枝の様子を看てもらおうと連れてきた蘭は、分析の結果をそう伝えた。

千里眼。全ての本質を見通すと言われるそれは赤羽サツキの右目

にも宿っている。娘である絹枝にもそれがあるのはごく自然の通りだった。

「幸い、今は落ち着いているようだからね、彼女には明日から魔力制御を教えていってあげよう。さあ、今日はもう遅い。しっかり寝て明日に備えよう」

蘭はそれだけ言い残して絹枝の部屋から去って行った。

「ほら、朔羅」

「うん……」

同じく連れてきたなぎさに引つ張られる形で、朔羅は絹枝の部屋を出た。

後ろ手にドアを閉めて、朔羅はそれにもたれかかった。俯く彼女に、なぎさは肩を竦める。

「もう、あんたがそんな顔してたら、鞘上さんも引け目を感じちゃうでしょ」

「そう、だよね……」

だが朔羅の表情に変化はない。絹枝が視てしまったものはきつと。そう考えるとどうしても、絹枝が倒れたのは自分のせいであるような気がしてしまう。

「とにかく、今日はもう寝なさい」

朔羅が頷くと、なぎさは自分の部屋に戻っていった。

朔羅も自室に戻り、ベッドに潜った。

第三話 空いたココロ

翌日、朔羅と絹枝の間には微妙な距離が空いていた。

登校中、二人の間に挟まれる形になったなぎさにとっては今にも頭を抱えて溜め息を吐きたい状況だった。

いきさつはなんとなく理解できる。昨夜暴走した絹枝の千里眼の件だろう。果たして何を視たのかは分からないが、もし朔羅が関係しているのなら、それは恐らく朔羅の記憶に関する事ではないか。

朔羅が『螺旋の環』にやってきたのはまだ彼女らが小学生の頃だった。蘭が連れてきた彼女はそれまでの記憶を何もかも失っていた。まるで人形のように。ただ人間としての機能だけが残されたかのよう。朔羅を見て、なぎさはそう思っていた。周囲を知らないもので覆い尽くされた彼女にとっては、ただそこにいるだけで恐ろしくて堪らなかったのだ。心を閉ざしてじっと塞ぎ込んでいた当時の朔羅はまさに生きているだけの人形のようなだった。

朔羅を見る。今でこそ底抜けに明るく人懐っこい彼女だが、沈む時はとことん沈んでしまう一面もある。そういう時は決まって、まだ出会った頃のような、何もかもが分からず怯えていた頃のような顔付きになるのを長年の付き合いからなぎさはよく知っていた。

絹枝に視線を送る。おっとりした子だというのは朔羅との共通見解だったが、なぎさはどうにもそれだけではないような気もしていた。歩き方の独特のリズムも気になる。それはどこか引きずるような感じで、見方によっては足が不自由そうにも見えてしまう。

絹枝の能力、千里眼。それは究極的には物事の本質を見抜く、ただそれだけのものだと言っていた。遠視、透視といった効果はあくまでその性質に付随するものであって、千里眼の本来の能力ではないと。

幾つもの付随効果を持つ千里眼だが、それ故に魔力回路の制御には難がある。使い勝手が悪くて困るとはサツキの弁だ。おまけに右目にしかないなんて希少価値が高いにもほどがあるぞ、と。普通、瞳に宿る特殊能力は両目に宿るものだが、魔力回路に負荷がかかり過ぎて片目にしか宿らなかつたのだろうとなぎさは解釈していた。

絹枝がこれまでどんな環境にいたのかは分からないが、少なくとも未だ自分の能力を制御しきれないところを見るにまともな魔法の勉強はしていないようだ。千里眼の暴走も昨日が初めてではあるまい。蘭には悪いが、そんなおよそ魔法使いとして数えられるかも分からない者を戦力として計算できるかは甚だ疑問だった。

「あ、の」

朔羅と絹枝は同時に口を開いた。おずおずと開かれたそれは、だがダブったせいで二の句が継げずに再び閉ざされてしまう。

二人とも、互いを意識しながらそれでもまともに言葉を交わせず歩き続けている。

全く、どうしろと言うのか。

なぎさは改めて頭を抱えなくなった。

6 .

学校に着いても状況は変わらなかった。昨日と同じように絹枝の周囲にできる女子の輪に、朔羅は距離を置いている。会話はなぎさとはばかりで、絹枝とは言葉をなんとか交わしても、それは授業中の教科書や筆記用具の貸与などある種事務的なものばかりで、尚更ぎこちなさは募っていた。

昼休みになると絹枝は女生徒たちに連れられて昼食に出て行った。朔羅はもちろん絹枝とは別行動を取った。なぎさと共に生徒会室のドアを開ける。

基本的に生徒会は放課後に開かれるが、昼休みに仕事を行うことも少なくない。そういう時はこうして昼食の段階から生徒会室を解

放するのが慣例化していた。ただ、今日は特に仕事をやるわけでもない。

「……ふう」

「じゃないわよあなたたちは。もう、間に挟まれる私の身にもなって欲しいわ」

席に着いて早々、大きく息を吐いた朔羅になぎさが肩を竦めた。

「ご、ごめんなさい……」

「別にいいわよ、もう。私は板挟みになってるだけだし、問題はあなたたち自身でしょ。何があつたの？」

朔羅は訥々と昨夜の件をなぎさに話した。

「……そう。で、自分の忘れてる記憶の事を視られたかもしれないけど、あなたは怖くて聞けないのね」

「怖くなんか……！ なくはないけどそのなんていうか……、怖い、です」

反論しようとした朔羅だったが、さっきまでの自分の態度を思い出して認めざるを得なくなる。

絹枝の千里眼の暴走が自分に関係しているのなら、また暴走を誘発してしまうのが怖くて交流できない。だがそれ以上に、絹枝の視たもの自体に触れてしまうのが怖くて堪らなかった。

今まで考えないようにしていたが、記憶を失うほどの何かがあるはずなのだ。それはもちろん記憶として抱えきれなかったほどのトラウマと呼べるものであるのは間違いない。頭を打ったからだのといった笑い話で済むはずがないのは、今の朔羅の境遇が雄弁に物語っていた。

今度はなぎさが大きく息を吐いた。朔羅の頭に掌を乗せる。

暖かい。朔羅が困った時、なぎさはいつもこうして頭を撫でてくれた。その度に朔羅は、なぎさが傍にいてくれる事を自覚して安心する。

「変わらないわね、あなたのそういう肝心なところで怖がりなところむ、と朔羅は頬を膨らませる。そんなはつきり言わなくても。」

なぎさはそんな朔羅を見て、少し大げさに吹き出して見せた。

「優しい、つて事よ」

「そうかな」

「そうよ」

なぎさは頷いた。朔羅には彼女の言葉の真意は分からなかったが、その口調はあまりにも自信に満ちていたため否定もできなかった。

「ほら、それよりも早く食べないと昼休みが終わっちゃうわよ。ついでに片付けていきたい仕事もあるんだから」

「あ、仕事するんだ」

「当たり前でしょ？ 何のためにここまで来たか分からなくなっちゃうじゃない」

生徒会室のドアに鍵を閉めるのは、予鈴が鳴るまでお預けとなりそうだった。

/

放課後、絹枝は一人で屋上へ上がった。

朔羅のとの間にできてしまった距離は、間違いなく自分のせいだろう。この右目が、あんなものを視てしまったから。

つい先程までクラスメイトの輪の中心にいた彼女だったが、無理を言って別れてしまった。疲れた。これまであんな多人数と時間を共にしたのは初めてだったため、軽く人酔いしてしまった。今はとにかく一人になりたい。

楽しくなかった訳ではない。だが人付き合いが苦手な絹枝からしてみれば今後もあの空間で過ごさなければならぬと考えると不安で堪らなかった。

それよりも問題は朔羅の事だ。どうすればいいのか一人で考える時間が欲しかった。考えたところどころでどうにかなるとも思えなかったが。

「あん？」

だが、屋上には先客がいた。背の高い男子生徒だ。無愛想に絹枝に向けられた瞳は、整髪料で逆立てて固めた髪も相まってか刺々しい。

「あ、ご、ごめんなさい……」

つい目を逸らして謝ってしまう。せめて彼とは違う場所へ、とドアから程近いフェンスの方へ足を運ぶ。しかし絹枝の歩き方を見た彼が思わぬ反応を見せた。

「なんだあんた、足悪いのか」

思わず立ち止まり、身を退いてしまう。自覚がなかったわけではないが、改めて指摘されるとつい過剰な反応をしてしまう。誰もが自分と同じ眼をしている訳ではないのに。

「べ、別にそういう訳じゃあ……」

「そうかい。悪いな、変な事聞いちゃって」

彼はドアに向かって歩いて行った。ドアノブに手を掛けて、ドアを開く。

最後に絹枝を振り返り、口を開いた。

「どうでもいいけどよ、あんた、俺が誰か知ってんのか？」

絹枝は首を横に振った。じっくり見るまでもなく、クラスメイトの中に彼ほど目立つ男子はいなかった。どこかで会ったという覚えもない。

「うっん、分からない。私、昨日転校してきたばかりだから。でも、そんなに怖い人じゃないと思う」

「そいつぁ結構。じゃあな。ゆっくりしていきな」

彼の姿が屋上から消え、ドアが閉まる。千里眼のせい、絹枝は直感にも優れていた。なんとなくだが今の彼が見た目ほど怖い訳ではないのも分かる。

夕暮れが近い空の下、絹枝は屋上に一人となった。

「朔羅、ちゃん」

自分が視てしまったものを思い起こす。これは間違いなく朔羅の失われた記憶だ。自分の眼に視えたものが真実であるのはこれまで

の経験上明らかだった。

朔羅が記憶を封じるほどの過去。こんなものを視たところで自分にはどうすればいいのかまるで分からない。それどころか、勝手に人の過去を覗き見してしまった嫌悪感と罪悪感が募るせいで朔羅との距離を広げてしまった。

ただ、それ自体は別に構わない。またこの眼が暴走してしまうくらいならいっそのの方がマシなくらいだろう。悪いのはこの眼だ。自分のようにまだ出会って間もない者が視てもいいはずがないものを、この眼は何の遠慮もなく見せつけてくる。

こうした経験は今回が初めてではない。千里眼が暴走する度に、知りたくもなかったものが絹枝には視える。激しく痛む右目と、視るべきではない光景。千里眼の暴走は決まって誰かに心を許した時だった。

右目を押さえる。たとえ閉じていたところで、透視の能力も兼ね揃えた眼に映らないものはない。どれだけ強く押さえても、そんな痛みは暴走時の苦痛には遠く及ばない。

「こんなもの、欲しくなかった……！」

赤羽サツキ。顔も知らない母親が、憎くて仕方なかった。

第四話 遠い彼方の私に似て

7 .

「お帰り、二人とも。絹枝君は一緒じゃないのかい？」

『螺旋の環』の玄関を潜ると、カウンターで朔羅たちの帰宅を迎えた蘭が意外そうに言った。彼女は一人、書類の整理をしている最中だった。店内には他に人の気配はない。

「絹枝ちゃん、帰って来てないんですか!？」

クラスメイトたちからは「用事がある」と告げて先に帰ったと聞いていた。ここに来たばかりの絹枝に用事とは何だろうと思っただが、朔羅たちも蘭からお使いを頼まれる事がしばしばある。何か蘭に頼まれたのかもしれないと考えれば納得いくものだったため、特に気にせず帰って来たのだ。

だがそれを訊ねると、蘭は首を横に振った。

「今日は特に何も頼む事はなかったからね。てっきり一緒に帰って来るものだとばかり思っていたよ」

生徒会の活動は基本的に五時頃までだ。放課後すぐに教室を出たであろう絹枝がまだ帰って来ていないのはおかしい。用事がなければ覚えていた道を辿って来るだけ。多少道に迷ったとしても、朔羅たちの帰宅までに帰って来る時間は充分あった筈だ。

朔羅は鞆をその場に放り投げて身を翻した。

「ちよつと、朔羅!」

制止の声も聞かず、朔羅は『螺旋の環』のドアを駆け抜ける。学校までの通学路を走る。絹枝は一体どこに行ったのだろう。彼女の行きそうな場所は。

朔羅は十字路で立ち止まって辺りを見回す。このまままっすぐ行けば上り坂、右はいつもの通学路、左は余り朔羅にとって馴染みがないが隣の市へ続く大通りに出る筈だ。

キヨロキヨロとしていると、朔羅に追いついたなぎさが息を切らせながら怒鳴る。

「もう、あてもなしにどうするの!」

「それは……」と朔羅が答えあぐねている時だ。

みゆう、と鳴く声が聞こえて二人はそちらを振り返った。

「みゆう!」

昨日の朝以降姿を見ていなかった黒猫がそこにいた。

「ねえ、みゆう。絹枝ちゃんを知らない?」

蘭の飼い猫である彼は取り分け聞き分けのいい猫だった。人語を完璧に理解しているような拳動は、もちろん彼がただの猫だからではない。蘭自身は何も語らないが、彼は蘭の使い魔なのだろうと朔羅たちは考えていた。

みゆうは朔羅たちに呼びかけるようにもう一度鳴くと、身を翻して走り出した。

「待つて、みゆう!」

彼は上り坂を一目散に駆け上がっていく。朔羅となぎさは懸命に彼に追いつがった。

みゆうは時折朔羅たちを振り返りはするものの、その足取りはともすれば見失ってしまいそうなほど非常に速い。それでも朔羅は全力で走り続けた。昨日の件を自分と同じく気に病んでいた絹枝。そんな彼女の行方が分からないという事実にも胸が締め付けられる。もう二度と会えないかのような不安と焦りがない交ぜになって、いてもたってもいられない。

昨夜、自分と仲良くしたいと言ってくれた絹枝の表情が脳裏に浮かぶ。あの時見せてくれた微笑みに、朔羅は彼女と本当に仲良くないれそうだと思った。だから、探す。探して、話したい。そしてもう一度微笑み合って、一緒に帰りたい。

角を曲がる瞬間、住宅の庭から大きくはみ出していた植え込みを避け損なった。ガサリと音を立てて揺れるそれには目もくれず、朔羅はひた走る。

やがて辿り着いたのは大きな歩道橋だった。最近完成したばかりの高速道路を跨ぐように作られたそれは規模の大きいものだった。

みゆうは歩道橋に上がって行く。朔羅たちもそれを追って歩道橋を上がると、そこには探していた人物の姿があった。

「絹枝ちゃん！」

「二人、とも……」

絹枝は朔羅となぎさの登場に心底驚いた様子だった。眼を見開いて二人を見ている。対照的に朔羅は、彼女が見つかった事にほっと息を吐いていた。全力疾走で派手に乱れた呼吸を、ゆっくりと落ち着けていく。

この子が案内してくれた、と言おうとして朔羅はみゆうの姿がない事に気付いた。

「あれ、みゆう？」

「またどこか、行っちゃったわね。……それよりも、鞘上さん」

弾む息を抑えながら、なぎさは絹枝に歩み寄ろうとする。朔羅もそれに続いた。

だが絹枝は、そんな二人から目を逸らして拒絶するかのようにかうんだ。

「来ないで！」

彼女のものとは思えない程の音量に、朔羅もなぎさも思わず足を止める。

「来ちゃ、ダメ。今までもそうだった。この眼が視たくないものを視て、痛くて、苦しくて……。こんな眼、欲しくなかった！ この眼のせいでみんなに迷惑をかけるなら、だったら私、もう一人でいい！」

絹枝の悲痛な叫びが響く。彼女の頬には涙が伝っていた。ずっと、そうやって辛い経験を繰り返してきたのだろう。それがどんなものだったのかまでは分からなくとも、彼女が朔羅たちを拒まざるを得ない気持ちは十分に理解できる。

だが、だからと言って彼女を放っておけるはずもない。

朔羅はぐつと唇を噛み締めて一步を踏み出した。

「いや……、来ないで……。でないと私、また、また……！」

絹枝は口を横に振りながら後ずさる。だが朔羅はもう、その足を止めたりはしない。

絹枝が視たであろう、朔羅自身が忘却している記憶。それを知るのは今も怖い。けれどそんなものはもうどうだっていい。思い出そうと思ってもいないものを怖がっていても仕方がない。今は絹枝がいなくなってしまう事の方が怖いのだ。

「大丈夫だよ。絹枝ちゃんね、自分の魔力が制御できてないだけなの。ちゃんと魔力制御を教えてもらえば、視たくないものを視なくてもよくなるんだよ」

朔羅の言葉に絹枝は顔を上げた。彼女はまだ、自分の身に起こる現象の原因を知らない。

「本当、に……？」

「うん。時間はかかるかもしれないけど、ゆっくりでいいからやっていこうよ。私は絹枝ちゃんが一人でどこかに行っちゃうなんてヤダ。せつかくできた友達だもん、ずっと一緒にいたいよ」

朔羅は手を差し伸べた。

「だから、ねっ」

「朔羅、ちゃん……」

絹枝はそろそろと朔羅の手に自分のそれを重ねようとする。

瞬間。絹枝は右目を押さえて蹲った。

「絹枝ちゃん！」

「朔羅、私に任せて」

駆け寄ってきたなぎさが、蹲る絹枝の前に屈む。

「痛むのね」

なぎさはそつと絹枝を抱き寄せた。優しい声色で彼女に語りかける。

「……私も、師匠に魔力制御を教わるまで力の暴走を抑えられなかったの。だからあなたの気持ちはすごく分かるわ。でも、怖がらないで。自分の力を恐れたらいけない。問題は私たちの心の在り方よ。私たちは、普通の人とは違う大きな力を与えられた。それを嘆くことなんかないわ。自分の力なんだもの。自分自身を、ありのまま、受け入れるの」

頭を撫でながら、絹枝を落ち着かせていく。

「自分、を受け入れる……！」

「そう、落ち着いて……。ゆっくり、ゆっくりでいいのよ」

痛みが和らいでいくのか、絹枝の呼吸が深く、静かになっていく。やがて彼女は落ち着きを取り戻したようで、右目を押さえる手を離した。

なぎさは絹枝を解放して、彼女と視線を合わせる。

「どっ、鞘上さん ううん。絹枝って呼んでもいいかしら」

「うん。もう大丈夫 なぎさ、ちゃん」

やはりなぎさは凄いなと朔羅は改めて思った。あれだけ苦しんでいた絹枝に、魔力制御を即座に教え込んでしまった。なぎさに抱き締められる絹枝の姿は、昔の自分に重なって映る。

そうか。朔羅はようやく気付いた。絹枝の表情は、ここに来たばかりの頃の自分によく似ていたのだ。

朔羅は今度こそ、絹枝の手を取る。

「帰ろっ、絹枝ちゃん」

第五話 沈みゆく街の光の中で

8 .

朔羅たちはベランダに並んで夜の街を眺めていた。

大通りを絶えず流れていた車の音も街の喧騒も徐々に止んでいく。仄かな家々の明かりだけが残っていく街並みを見つめながら、三人はただ過ぎていく時の中にあつた。

もちろんそれは、今朝のような重々しい沈黙とはかけ離れたものだ。穏やかな波に揺蕩うかのように、静かに時間は流れていく。

やがて、口を開いたのは絹枝だ。

「……本当にいいの？ 朔羅ちゃん」

朔羅はこくと頷く。

「うん。知りたくないわけでもないし、それが怖くないわけでもないけど……。でもまだいいの。決めたんだ。私がそれが必要だと思うまで、誰にも訊かないって。絹枝ちゃんだけじゃなくて、師匠も蘭さんも知ってる筈だし」

朔羅をこの『螺旋の環』に連れてきたのは蘭だ。その彼女なら朔羅の事情を知っているのは道理と言えるし、絹枝と同じ眼を持つサツキが知らない筈がない。

「それでいいのよ、あんたは。全くもう、難しく考え過ぎなんだから」

悪態を吐きながらもなぎさは朔羅へ微笑みを向ける。

「むー、人が単純みたいにー！ ……でもまあ、そういう事。それとも絹枝ちゃんは、言いたくて仕方なかったり？」

朔羅がおどけて訊いてみると、絹枝はぶんぶんと首を横に振った。「でしょ？ 私は絹枝ちゃんが知っててくれればそれでいいよ。友達がちやんと私の事知っててくれるって事でしょ？ だったら私はそれでいい。昔がどうでも、今ここに二人と一緒にいる私は今の私

「なんだから」

例え忘却の彼方にある朔羅がどんな人生を送っていたとしても、今の朔羅が在るのはそれとは何の関係もない。

絹枝は頷いた。

「うん。私、朔羅ちゃんの事よく知ってるよ」

街の明かりは静かに消えていく。やがて街が完全に寝静まった頃、三人はそれぞれの部屋に戻った。

第六話 朝の来客

父も母も、友達も。大切な人はみんな消えてしまった。けれど自分だけは消えない。ずっとここに在る。

自分を消せる方法はたった一つだけだった。

こんな世界、何もかも消えてなくなればいい。

1 .

朔羅は頭痛と共に目を覚ました。

何か夢を視ていたような気がするが、それがどんなものだったのかは既に覚えていない。

久し振りの感覚だった。ここに来たばかりの頃は頻繁に起きていたものだったが、年を経る毎に落ち着いてきていたし、最近に至ってはめっきり見られなくなっていたものだ。

朔羅は起き上がると、まずテレビを付けた。行方不明になっていた女子中学生が遺体で発見。先日の岐阜県山中で起きた森林の火災事故。朝のニュース番組を横目に朔羅は着替えを始めた。パジャマの上を脱ぐと、まずは下着を付ける。そのどこか窮屈な感覚に、朔羅は自分のそれなりに大きな二つの膨らみを見下ろす。なぎさちゃん並みのプロポーションに一步近づいたかな。絹枝ちゃんも結構大きいよね。流石師匠の娘さんだけはある。蘭さんには、うん、勝ってるからいいや。

ただ、相変わらず身長に変化は見られないのだが。それに気付くと、一瞬忘れかけていた頭の鈍痛とともに気分もただ下がりであった。

制服を着用し、腰まで届く長い髪をツールにまとめればいつも通りの朔羅の完成だ。彼女の髪はなぎさが毎日のように手入れをしてくれる程の髪質を持っており、ずっと伸ばし続けてきた事もあ

ってか自慢の一つだった。

着替えを終えると、テーブルの上の頭痛薬に視線を向ける。正直、それが必要な程かどうかは微妙な所だ。

小首を傾げて迷った後、それを手にして朔羅は部屋を出た。ドアを開けた時、消し忘れていたテレビには気付いて消した。

「蘭さん、おはようございます」

「ああ、おはよう朔羅君」

共用のリビングまでやってくると、キッチンで朝食を準備している蘭と挨拶を交わし、朔羅はテーブルに着いた。なぎさと絹枝の姿はまだない。どうやら今日は朔羅が一番乗りのようだった。普段が最下位だけに喜びたいところであったが、こうして一番にリビングに来れるのは決まって今日のような起きかたをした時ばかりなので大して喜ばしくはないのが残念であった。

蘭はいつも通り紅茶を振る舞ってくれりと、朝食の支度に戻っていった。最も、調理をしているのは彼女自身ではなく使い魔なのだが。

「あ、おはよう、朔羅ちゃん」

「絹枝ちゃん、おはよー」

続いてリビングにやってきたのは絹枝だった。再びこちらへやってきて紅茶を淹れた蘭とも挨拶を交わし、朔羅の隣に座る。

程なくしてなぎさもリビングに入ってきた。彼女は挨拶の後、テーブルの上に置いてある朔羅の頭痛薬に目を留める。

「朔羅、今月そんなに酷いの？」

「え？ あ、ううん、そういうのじゃなくてちょっと起きた時から頭が痛くて」

「……そう。あんまり無理したらダメよ」

「そうだよ、朔羅ちゃん。昨日も遅くまで夜風、当たってた訳だし……。風邪、引いてない？」

「うん、大丈夫だよ。二人ともありがと」

朔羅は心配そうに見つめてくる二人に笑みを返した。彼女の表情

に安堵してかなぎさは息を吐いて絹枝の隣に座った。すると朝食の準備を終えた蘭が配膳にやってきて、皿を並べながら朔羅に向けて言う。

「ふふ、でも朔羅君は元気そうに見えて、季節の変わり目には弱い所があるからね。調子が悪かったらすぐに言うんだよ」

「はい」

配膳が終わり、四人は揃って朝食を取り始めた。今日の献立は白米に味噌汁、焼き魚と和食風である。

「なぎさちゃん、お魚、綺麗に食べるんだね」

「そう?」

魚を食べ終わったなぎさの皿を見て、絹枝が感嘆の声を出す。なぎさの皿に残っている頭と骨、臓器の部分はまるで肉と皮をそのまま取り除かれたかのように綺麗に残されていた。

「なぎさちゃんは几帳面だもんね」

「そういう朔羅はもっと丁寧に食べた方がいいんじゃないかしら」
「む」

朔羅は自分の皿を見る。そこには食べ散らかされた残骸が奇怪な絵画を描く図があった。

「ふ、まあ気にせず食べたいように食べてくれれば構わないよ」

そういう蘭の皿には何も残っていなかった。全く。本当に何も。

「ん?」

ふと、店の扉が開くベルの音が鳴った。誰だろうと全員がそちらの方向を顧みるがもちろんそこから入口は見えない。

「お客さんですか?」

「いや、予約は何も入っていない筈なんだけれどね。ちょっと行ってくるよ。片付けは頼んでいいかな」

蘭はそれだけを言い残してリビングを後にした。

第七話 仮面の男と問題児

「それではお嬢様、この件はくれぐれもご内密にお願いします」

「ああ、分かっているよ。ご苦労だったね紗悠里君」

依頼を受諾した蘭は、クライアントである玖珂紗悠里と共に立ち上がり事務室から店内に戻る。

紗悠里は乱雑に商品の陳列された店内を、慣れた足取りで入口の扉まで進んでいく。扉の前まで辿り着いて振り返る紗悠里に、蘭は声をかける。

「それじゃあ、今夜は頼んだよ」

「はい。では失礼します」

と頭を下げた紗悠里は『螺旋の環』を後にしようとした。

「あ、紗悠里さん！」

「どうも。お邪魔していますわ、風代さん」

だが、朝食の片付けを終えたらしい朔羅が様子を見に来たため、紗悠里は再び立ち止まって挨拶を交わした。

彼女は蘭の親戚で、魔法使いギルドとしての『螺旋の環』を知る人物だ。現オーナーの親戚という縁もあり、常連客として依頼を持ち込んで来る事も多い。朔羅とは同じ年で、友人と言ってもいい程に打ち解けた顔馴染みでもある。

朔羅は二階から踊るような足取りで降りて来る。彼女と雑談を交わし、紗悠里は今度こそ店を出て行った。

朔羅は手を振って彼女を見送った後、振り返り蘭に問う。

「紗悠里さん、何の用事だったんですか？」

「私への依頼だよ。この男を探して欲しいそうだ」

蘭は一枚の写真を朔羅に見せる。朔羅はそこに写る人物の容貌に思わず顔を顰めたようだった。無理もない。写真の中に写っている

のは、大きなバイザーで目元から額までを覆い隠した男だからだ。お陰でその人相は盛大に謎めいてしまっている。

「人探し……ですか。玖珂さんにしては珍しい依頼ですね」

続いてなぎさも絹枝を伴って二階から降りて来た。二人も蘭の持つ写真の男を見つめる。すると二人も朔羅同様、怪訝そうな表情を浮かべた。

「……どうして、玖珂さんはこんな人を探しているんですか」

かろうじて絞り出したかのような声で呟くなぎさに、蘭は肩を竦める。

「済まないけれど、それについてはクライアントから他言無用を厳命されていてね。君たちはもし彼を見かけるような事があれば私に報告して欲しい」

蘭はそう言つて、まだ腑に落ちないような表情でいる三人に登校の準備をするよう促す。

朔羅たちはしぶしぶ二階に上がろうとするが、途中で朔羅が足を止めて振り返る。

「そう言えばその人、何ていう人なんですか？」

「名前は分からないそうだよ。ただ、そうだね……」

便宜的にでも呼称は有った方がいいだろう。蘭は『螺旋の環』の業務とは全く関係のない、彼女の個人的な商売道具であるトランプのデッキを手に取り、一番上の札をめくった。

「ジョーカー、とでも呼ばせてもらうとしようか」

蘭の手元で、仮面に素顔を隠した道化師が嗤っていた。

2 .

登校中、朔羅は口許に手を当てて考え込むような姿勢で歩いていた。

あの人、どこかで……。

ジョーカーと呼ぶ事になった写真の男性。朔羅はあの奇妙な容貌

をした彼に見覚えがあるような気がしていた。

もちろんあんな大型のバイザーを付けた人物など見た事はない。だが写真から感じ取れる雰囲気には、何故か仮面の奥の素顔を知っているような気にさせるものがあつた。

ただ、どれだけ考えても思い当たる人物は見当もつかないのが現状だつたが。

「朔羅ちゃん？」

「え？」

絹枝に呼びかけられ、朔羅は顔を上げる。

視線の先には、心配そうに自分を見つめる絹枝となぎさの姿があつた。

「どうしたの、朔羅ちゃん」

「大丈夫？ 体調悪いならちゃんと言いなさいよ」

今朝の頭痛の件もあり、二人が心配するのも無理はない。

だが今は薬が効いてくれているお陰か痛みは引いていた。「大丈夫だよ」、と朔羅は二人に向けて笑顔を作つた。

その様子にほつと息を吐くなぎさと絹枝だつたが、尚更先程までの朔羅の様子が気にかかるようだつた。

二人に見つめられ、朔羅は観念したようにジョーカーについての感覚を説明する。

「……そう言われてみると、そんな気もするわね。私もどこかで見た事があるのかしら」

なぎさも記憶を思い返してみるが思い当たる節はないようだつた。

「絹枝、何か見えなかつた？」

絹枝の持つ千里眼なら真実が分かるはずだ。だがなぎさの質問に絹枝はどこかしょんぼりした様子で呟く。

「私の眼じゃ、あの人の事、何にも見えなかつた」

「そんな事って……」

朔羅は驚きを隠せなかつた。全ての真実を見通すはずの千里眼が、仮面の奥の素顔を暴けないとは。

「ただ、何かすごく拒絶されたような、そんな感覚だった」

絹枝は写真を視て感じたままを伝える。まだ完璧とは言えないものの、彼女は千里眼を自分の意志で操れるようになり始めている。今回初めて意識的に千里眼を行使してみたが、結果は芳しくないものになってしまった。

まだ自分の魔力制御が上手くいっていないせいなのかなと落ち込む様子を見せる絹枝に対して、なぎさは彼女の言葉と写真から得られた情報を冷静に分析する。

「どうやらあのバイザー、特殊な加工を施した魔法具のようね。それで千里眼の効果を遮断しているんだわ」

「ごめんね、私、役に立てなくて……」

「そんな事ないわよ。寧ろ視えなくて正解かもしれないわ。そんな高度なものを身に着けている程の人だもの。私たちが考えている以上に厄介な依頼かもしれないわ。もし見つけたら、深追いはせずに即、蘭さんに報告する事。いいわね？」

朔羅も絹枝も、緊張した面持ちで頷く。

「それにしても、何でジョーカーさんは刀なんて持ってたんだろう」朔羅が気になったのはジョーカーに対しての既視感だけではない。写真はお堂のような場所から出てくる彼を撮影したものだ。その手には刀身の長い刀があった。

「さあ……。あれが彼の武器なら、かなり手練れの退魔師かもしれないわね。なんにせよ、もし彼を見つけたら私たちは蘭さんに報告するだけでいいわ。私たちにはこの辺りに湧いて出てくる魔の討伐っていう役目があるんだから」

「そうですね。鞘上先輩も協力して下さるとはいえ、気を引き締めていかないと」

声に振り返れば、そこには爽やかな笑みを浮かべた水輝の姿があった。

「あ、水輝君、おはよー！」

「おはようございます」

挨拶を交わし、立ち止まっていた四人は再び学校へ向けて歩き出す。

「人数が増えたとはいえ、絹枝はまだ魔力制御を学び始めたばかりなのよね」

「大丈夫だよ！ それくらい戦つてればできるようになるよ！」

「それはあんなだけでしよう。基礎ができてないのに戦闘だけはいなせるなんて。でもあんなの場合、そのせいでミスも多くて危ないよ？」

朔羅はうぐ、と押し黙る。

火、水、風、地。四大元素と呼ばれる世界に満ちる属性。魔法使いは自らの持つ魔力回路と呼ばれる特殊な神経と調和する事で、初めて魔力というエネルギーを生み出せるが、そうして生み出した魔力は基本的に何の形も持たない気体のようなものだ。ところがこれを四大元素と掛け合わせると、魔力はその性質を得て顕現する。これこそが四大元素魔法と呼ばれる、現代において最もピュラー且つ利便性に優れた魔法系統だ。

「私と水輝君は風。絹枝はそうね……、火、じゃないかしら。師匠もそうだったし」

また、魔力回路は個々人により適合する四大元素に違いが現れる。それは先天属性と呼ばれ、魔力回路が持つ属性そのものと言ってしまってもいいだろう。

「朔羅ちゃんは？」

「うーん、そのー、私はー……」

「朔羅はね、先天属性が未だに分からないのよ」

しかし例外というものも無存在する。朔羅の場合、適合する四大元素がまだ見つかっていない。彼女が『螺旋の環』で暮らし始め、魔法使いとしての修業を始めて約七年が経とうとしているにも関わらずだ。一応、四大元素魔法の修練は続けてみてはいるものの、朔羅自身を含めた誰もが彼女の魔力回路に適合する四大元素はないのだからと結論付けていた。

「そう、なんだ……。朔羅ちゃん、どんまい」

「ふぐつ、無邪気な励ましがぐさつと心に刺さりそうです先生！」

「誰が先生よ誰が」

「うーん、平和ですねえ」

「遠目に見て和むんじゃないわよその金髪碧眼！」

ボケ三人、ツッコミ一人という布陣で進む四人の元にその悲鳴が聞こえたのは、丁度この時だった。

「な、何でもします！ 何でもしますから！ 頼む いや、お願いします、命だけは勘弁してくださいッ！！」

全員がこの絶叫とも言える悲鳴に驚いた朔羅たちが視線を向けると、そこには四人の男子生徒がいた。斜に構えて立つ一人の前で、他の三人が地面に這いつくばるような姿勢で彼を見上げている。悲鳴を上げたのはその這いつくばった三人の内の誰かだろう。

どう考えても、恐喝か何かの現行犯であった。

「あの人……」

絹枝の呟きが聞こえたか否か、朔羅は彼らの前にバツと躍り出る。

「ちよつと、何してるの!？」

「あん？」

血気盛んに飛び出した朔羅の声に、恐喝犯であろう彼が振り返る。朔羅より遙かに高い長身、整髪料で逆立てた髪が特徴的な彼を、朔羅は知っていた。会うのは初めてだが、その悪評が生徒会役員である彼女の耳に入っていないはずがない。

「ひ、ひいつー!!」

するとその隙を突いて、這いつくばっていた三人が一目散に逃げ出す。彼らはあるという間に通学路の向こうに消えてしまった。

「ちっ、あいつら……。はっ、まあいいけどよ」

三人が走り去った方を見やり、彼は再び朔羅を振り返る。

「あんだ、生徒会か？」

「そう、だけど……」

「はっ、そいつあ結構。なら、次はもつと早く来た方がいいぜ」

どういう意味だろうか。しかし考えるよりも前に、彼はまるで何事もなかったかのように歩き出していた。

「あ、待って！」

だが朔羅の制止の声も無視して、彼は悠々と歩き去ってしまった。呆然と彼を見送るだけだった朔羅たちの沈黙を破ったのは、絹枝だった。

「あの人、は？」

「……扇空寺京太。私たちの一つ下の学年で、月島君とは同じ年だったわね。今生徒会が一番気を付けないといけない、我が校一の問題生徒よ」

扇空寺。そういえば最近、その名を別のどこかで聞いたような気がするがどこでだっただろう。

朔羅の中で、また疑問が増えてしまった。

第八話 考えるより先に

3 .

「次はもつと早く来た方がいいぜ」

「あんたが苛立つてるのは分かったわよ。似てないからもうやめなさい」

「はい」

無愛想な表情を作って京太の物真似をする朔羅になぎさのツッコミが入る。

放課後の生徒会では現在、四月末に控えているクラス対抗球技大会の準備が進められていた。朔羅は唇を尖らせながらも作業に戻る。彼女が担当している作業は対戦表の製作だった。机の上に広げた模造紙に定規を当てながら線を引いていく。中学時代最も成績のいい教科は美術だった朔羅にとって、こういった作業はお手の物だ。

「でも会長、その話だと彼は他の生徒に被害を与えたんでしょう？」

これ以上問題行動を起こされる前に手を打たないと……」

役員の一人がそう言うと、他の役員たちも頷いてなぎさに視線を集める。

朝の一件は今しがた朔羅が微妙な物真似を交えて説明したばかりだ。これに対し役員たちは皆、生徒会として憤りを感じているようだった。

なぎさはそんな鋭く尖った視線を一手に集めながらも一切たじろいだ様子を見せず、冷静に口を開いた。

「そうね。けれど前年度の生徒会がどうにもできなかつたのと、生徒指導の先生方が手をこまねいている現状を考えると対応は慎重にならざるを得ないわ」

この言葉に生徒会室内がざわつき出す。無理もない。扇空寺京太に関する悪い噂は留まるところを知らない。曰く、中学時代に周辺

一帯の暴走族を全滅させて多数の舎弟を束ねる頭になった、ヤクザと関わりがあり自分の管理するシマを持っている、そのせいでこの町の不良は彼の顔を見ただけで頭を下げて逃げ出してしまおうといった悪評が広がり、に広がっている。

そんな生徒が自分の通う学校にいるという恐怖は、一般の生徒はもちろん生徒会内にも溢れている。この学校での彼はこれまで遅刻や無断欠席といった程度の不良行為を続けているに留まっていたが、今回の一件は明らかに他の生徒まで被害が及んでいる。消極的に聞こえるなぎさの言葉を受けて動揺や不安を隠せる役員は殆どいなかった。

でも、となぎさは全員を真っ直ぐに見つめて続ける。

「彼も来年は三年生。最上級生よ。これ以上大きな顔をされる前に、私になんとかしてみせるわ。今日はこれで解散にしましょう。全員、作業の続きは明日に回して」

生徒会長自らが動くという宣言に多少なりとも安心感を得たのか、役員たちは落ち着きを取り戻して片付けを始めた。今日の作業の進捗度はそれほど芳しくはなかったが、球技大会当日までには間に合うだろう。おそらくなぎさもそのつもりだと察しながら朔羅も片付けを手伝う。

生徒会が解散した後、室内に残ったのは朔羅となぎさ、水輝の三人だ。なぎさの指示であった。朔羅はともかく、水輝はなぎさの言葉に唯一ざわめきを見せなかった役員でもある。

「……扇空寺京太が今も野放しにされている理由、あなたたちなら分かってるわよね？」

「はい」

「え？」

切り出されたなぎさの質問に、朔羅と水輝は正反対の反応を示した。どうやら完全に理解している様子の水輝に対して、朔羅は何が何だか全く分からず間の抜けた声を上げてしまった。

だがそんな朔羅の反応は想定内だったのか、なぎさは冷静に質問

を変える。

「元魔戦争の五大英雄を全員、フルネームで言ってみなさい」

質問というより小テストみたいだと思いつつも、それなら分かつと朔羅は指折り数えながら答える。

「えつと、赤羽サツキ、イリス・ウィザーズ、シオン・クロスロード、ラファ・アンドレル、扇空寺辰真……あ」

全員言い切ってから、朔羅はようやく得心した。扇空寺という苗字に聞き覚えがある筈だった。そもそも一昨日の夜、扇空寺辰真が故人となつて一年が経つという話を蘭から聞いたばかりだ。

この物珍しい名前が指し示す事實は、恐らく一つだろう。

「扇空寺京太。かの五大英雄の一人、扇空寺辰真の実の孫よ。予想はしていたけれど朔羅、まさか本当に気付いてなかったのね……」

「あ、あはははは……」

心底呆れた様子なぎさに対し、朔羅は乾いた笑いを浮かべる事しかできなかった。

「ででで、でもでもでもっ！ それが何で扇空寺君が野放しになつてる理由になるの？」

朔羅の問いに答えるのは水輝だ。

「一言で言えば、その名前の持つ影響力ですよ。公立とは言えこの地域の特性上、この学校には魔法使いや退魔師の先生方が多いです。扇空寺辰真という世界を救った英雄の名前をないがしろにはできないんですよ。そうでなければ、彼は入学試験すら受ける事ができなかったでしょうしね」

魔。この世の裏側に跋扈する到底人では有り得ない化け物たち。特に妖怪や物の怪と言ったたぐいの他国に類を見ない魔たちが古来より蔓延っていた日本では、これに対抗するため独自の退魔技術、組織系統が形成されてきた。現代に至っては各学術機関において、自警団的に周辺地域の異常に対応するべく、退魔の力を備えた教員が数名以上配備されている。もちろん、一般の生徒や教員はそういった者たちの特殊な側面を知る事はない。そしてそれは人外の力を

持つ彼らを公務員という管理しやすい役職に納めてしまおうという意味も込められているのだが。

それはともかくとして現在、この学校の校長は退魔を生業とする者が務めている。朔羅たちの師でもある五大英雄、赤羽サツキとも付き合いがあると言われている人間であり、京太に便宜を図ったのは無論この校長であった。生徒指導の教員が京太に手を出せないのも、校長の影響が大きいのは言うまでもない。

「うーん、そういうものなのかなあ」

水輝の話は理解できるが、朔羅としてはどこことなく腑に落ちないものがあつた。それが上手く言葉にできないものの、何となくもやもやしてしまう。

「残念だけどそういうものよ。ただ、彼もこの学校の生徒である以上はそれらしくしてもらわないと、何より私たち生徒が困るわ。先生方が手を出せば角が立つのなら、生徒間の問題としてきっちり片付けてしまえばいいのよ。そうすれば、せいぜい目くじらを立てられるのも私一人で済むでしょうし」

「むー」

サバサバとしているが、どこか諦観めいた調子の見えるなぎさの言葉に朔羅の中のもやもやは大きくなる。これは一体なんだろう。何が私の中で納得できないんだらうか。

と。生徒会室のドアを叩くノックの音がして、全員がそちらを仰ぎ見た。

「なぎさちゃん、入っついていい？」

訪問者は絹枝だった。ドアのガラス越しに見える彼女の姿に、なぎさは頷いて見せる。

「失礼、します。生徒会、終わったんだよね。朝の事、ちょっといいかな」

ドアを開け、入ってきた絹枝はそう持ちかけてきた。どうやら生徒会が終わるまで待つていてくれたようだった。朝の事と言えばジヨーカーかもしくは京太の事だらう。朔羅は自分の隣の椅子に絹枝

を招いた。

「それで、朝の事って？」

「あ、うん、あの扇空寺京太君って人の事なんだけど……」

「それなら丁度、私たちも話してた所よ。どうしたの？」

「あの、私ね。昨日もあの人にあつたの」

初耳だった。驚く朔羅たちだったが、続きを促す。

「放課後、学校の屋上に行ったときに会ったんだけど……。私、この眼のお陰でだと思っただけど、時々なんとなく絶対そうって感じる時があつて。それであの人と会った時、悪い人じゃないなと思つて」

千里眼は物事の本質を見抜く能力だ。その複数ある余剰効果に高い直感力があつても不思議ではない。朔羅たちからすれば信憑性も高く納得のいくものだった。

「だから、朝の事も何か事情があるんじゃないかな、つて。言つてたよね、次はもっと早く来た方がいいつて」

「うーん、でもそれつて、俺を止めたいならもっと早く来てみるゝとかそういう意味じゃないの？」

「分からない。千里眼であの人を視てみたけど、何も視えなかったから」

朔羅たちの表情が再び驚愕に染まる。まさか一日の間に二人も千里眼の通用しない人間が現れるとは。

「なぎさちゃん、もしかしてジョーカーさんつて！」

勢い任せに立ち上がりなぎさを見やる朔羅に対し、同じ事を思ったのだろう、朔羅の言葉の意図を瞬時に汲みとつたなぎさがしかしそれを否定する。

「落ち着きなさい、朔羅。確かに千里眼が通用しないつていう共通点があるけれど、それはあのバイザーのお陰でしょう？ 扇空寺京太に通用しなかった理由は分からないけれど、恐らく彼自身が相当な魔力耐性をもっているのかも知れないわ」

「でも、もしあのバイザーのせいじゃなかったら？ あれがただの

正体を隠すためのお面みたいなものだったら分かんないよ！」

朔羅の言葉に珍しく一理あると認めたのか、なぎさは口許を押さえて押し黙る。少し考え込むような様子を見せた後、絹枝に質問を投げかける。

「ジョーカーを見た時、拒絶されるような感覚だったって言ったわよね。扇空寺京太の時はどうだったの？」

「あれは……。なんていうか、スツと通り抜けちゃうっていうか……。ジョーカーっていう人がすごく跳ね返してくるような感じだったら、あの人は何にもせずに受け入れられたような感じ、かな」

「そう……。とにかくまずは蘭さんに連絡を」
瞬間、ずつともやもやしたものを抱えていた朔羅のそれが爆発した。

「私、扇空寺君の所行ってみる！」

「ちよつと！ 待ちなさい、朔羅！」

なぎさの制止も聞かず、朔羅は生徒会室を飛び出した。

4 .

なぎさの言葉が聞こえなかった訳ではない。自分の行動が彼女の意向を無視した軽率なものであるのは十分に理解しているつもりだった。

ただそれでも、話している間に大きくなっていくもやもやとした胸のしこりのような何かに、朔羅はいてもたってもいられず行動できるタイミングが欲しかったただけだ。正直な所、京太とジョーカーがイコールで結べるのかどうかさえ実はどうでもいい。

絹枝は放課後に屋上で会ったと言っていた。生徒会が終わるような時間まで彼がいるのかどうかは怪しかったが、それでも朔羅は屋上を目指して階段を駆け上がった。最早自分が動かなければという強迫観念に突き動かされているようなものだ。

屋上のドアの前に辿り着くと、上がった息を整えるべく深く息を

吸う。大丈夫、怖くない。

ドアノブに手をかける。このドアを開けばもう後戻りはできないだろう。彼が既に下校してしまったならそれでいい。むしろそちらの方が喜ばしいかもしれない。どちらにせよ、ここまで来た以上このまま引き返すつもりはない。

握った手に力を込めてドアを開けた。

扇空寺京太はそこにいた。

だが屋上に寝転がっている彼は朔羅に気付いた様子もなく、微動だにしない。

朔羅は彼の傍にゆっくりと近付いていく。彼の胸元には広げた状態の文庫本が置かれていた。朔羅はそれを確認した瞬間その意外さに驚いてしまう。

今流行りのライトノベルだった。朔羅も好きなシリーズで、表紙を飾る赤い髪の少女が主人公のアクション活劇だ。こういうものというかそもそも本など読みそうにないイメージがあったため、そのギャップに少し親近感を覚えてしまいそうになる。

いや、それよりも。朔羅は気を取り直して京太の枕元に立つ。京太の耳にはイヤホンがあった。コードは制服の胸ポケットに伸びている。恐らくその中にプレイヤーがあるのだろう。音漏れのない所をみるにそこまで大音量で使用している訳ではないようだが、朔羅に気付かないのはこのイヤホンのせいらしい。せつかく自分を鼓舞してここまでやって来たにも関わらず完全に無視されているというのも面白くない。

それにしてもすごいツンツン頭だなーとか、どんなワックス使ってるんだらうとか余計なことを考えながらそつとイヤホンに手を掛ける。そのまま一気に外して、

「放課後だよ、扇空寺君！」

耳元で声を張り上げた。どうだ、まいったか。私を無視した罪は重いのです。まる。としてやったりな顔をしている朔羅だったが、京太が依然として微動だにしないのはまるで堪えていないからだ

気付くと、逆にたじろいでしまう。

「えと、扇空寺……君？」

「ああ？」

もう一度呼びかけると、京太は心底鬱陶しそうに朔羅を睨み付けてきた。その眼光に朔羅は思わず身を退いてしまう。

京太はそんな朔羅を気にかける様子もなくイヤホンをふんだくり、立ち上がる。大きい。朝も思ったが、こうしてより間近で相対する事で慎重さを実感する。180センチは軽く越えていそつだ。150ギリギリの朔羅からすれば、この至近距離では大きく仰ぎ見る形でなければ顔が見えないくらいだ。

京太は床にぞんざいに置かれていた鞆を拾い上げて文庫本を仕舞う。どうやらこのまま下校するつもりらしい。たじろいでばかりもいられない。朔羅はぐつと歯を食いしばってから京太に問いかける。「私、三年の風代朔羅です！ 生徒会の役員として、朝の件で聞きたい事があります！」

生徒会の腕章を見せつけながら高らかに宣言した朔羅に対し、京太は溜め息交じりで気怠そうに答える。

「言つたら、次はもっと早く来いってな。俺から言う事はもうねえぜ。分かつたら、ガキはとつと帰んな」

「ちよ、ちよつと待つてよ！」

何食わぬ顔で朔羅の横を通り抜けてしまおうとした京太の道を、朔羅は慌てて両手を広げて立ち塞ぐ。頬を膨らませて上目遣いに睨み付ける朔羅に対し、京太は「は」と肩を竦める。

「水輝、後は頼むぜ」

「はい」

「えっ？」

後ろから聞こえた声に朔羅が振り返ると、そこにはドアの前までやってきたなぎさたちの姿があった。

「朔羅、もうこの件は大丈夫。帰るわよ」

どこか慥然と言いつなぎさの言葉に、朔羅は訳が分からず小首

を傾げてしまう。

「だよ。じゃあな、先輩」

皮肉交じりに言い放ち、今度こそ京太は朔羅の脇を通り抜けてしまった。まるで意味が分からない朔羅は、どうしていいか分からず立ち尽くすしかなかった。

屋上から出ようとした京太に、なぎさが声をかける。

「あなたの処遇に関しては概ね理解したわ。でも私が生徒会長である以上、生活態度は改めるよう努力してもらおうよ」

「そいつぁ結構。まあ、せいぜい頑張りな」

「ふん」となぎさが顔を背ける間に、京太はその場から去って行った。

訳が分からないままの朔羅だったが、京太がいなくなってから程なくしてぽつりと呟いた。

「……どういふこと？」

第九話 監視役

5 .

扇空寺京太の入学に際して、生徒の中から監視役が一人任命されることとなった。監視役が京太の素行を観察し、校長へ報告する。もし京太が行き過ぎた問題行為を行うようであれば、監視役は停学や退学という処分を申請する。それが校長の用意した京太の入学へ便宜を図る唯一の条件だった。これは生活指導の教員が京太に対して指導を行う手間を取り除き、他の一般生徒へ意識を集中できるようにという配慮からである。

この条件の元、京太は入学試験を至極全うな成績でクリアして入学した。それでも反対の声は絶えなかったが、監視役に選ばれた生徒が決め手であった。

それが月島水輝だ。この年の入学試験をトップの成績で合格した彼は品行方正を地で行く生徒であり、何より出身中学が京太と同じである事から監視役にはうってつけと言えた。水輝が京太の監視役になると完全にはないものの反対意見は沈静化し、様子見という形が取られる事となったのだ。

それから一年が経ったが、今の所京太に関しては教員が誰一人として手を煩わせる事もなく、生徒たちからも近寄りがたい噂に溢れている不良という以上の評価を受けていない。生活態度こそ最低レベルだが、水輝という監視役が効果的であり優秀であるという事実を如実に示していると言えた。

「っていう事は水輝君って、扇空寺君の知り合いだったの!？」

「ええ。実は小さい頃からのお友達なんです」

水輝からの説明を受けて、朔羅が一番驚いたのはそこだった。それはともかく結局のところ一番のポイントは、水輝が監視役を務めている限り扇空寺京太を相手にする必要はないという事だ。なぎさ

のように生活態度を改めさせたいのならまた別の話だが。

しかしだからと言って、朔羅たちの問題が解決された訳ではない。まず一つは、京太とジョーカーの共通点についてだ。両者は絹枝の千里眼が通用しないという点において共通しており、尚且つ写真を見た時に感じた既視感も、今日が初対面であれど以前から知っていた顔であるが故に説明が付く。

「現時点では否定も肯定もできませんが……京太君には強い抗魔力が備わっています。夜に活性化する能力だと聞いていますが、朝や昼でも害意のない能力くらいなら遮断できるでしょう。ジョーカーという方に同じ能力があるかどうか分からない限りは断定できませんね」

これが水輝の見解だった。今は様子を見るべきだという事だ。だが問題はもう一つある。

「今日の朝のあれはどうなるの？ あれってどう見ても問題じゃない？」

「あれは正直な所、僕にも何と云っていいか……。事実関係をしっかり把握しないと何とも言えませんね」

これまで他の生徒が被害者になるという問題を起こしていなかった京太だったが、朝の一件でその立場は一気に危ういものとなってしまった。水輝はこの時点で処分を申請できるが、その前に彼自身が事態の全容を調べたい様子であった。

「この件に関しては一旦僕にお任せください。調査する時間が必要です」

「ともかく、今日はもう帰りましょう。蘭さんが心配するわ」

なぎさの一言により、朔羅たちは下校する事にした。水輝とは途中で別れ、朔羅、なぎさ、絹枝の三人は共に『螺旋の環』へ向かう。「うーん、いい線行ってると思ったんだけどなあ」

朔羅は腕を組んで呟く。

「取り敢えず、帰ったら蘭さんに報告するわよ。ジョーカーの正体が誰であれ、私たちは手を出さないって朝決めた筈でしょ」

「そつだよ。朔羅ちゃん、焦り過ぎ」

「うぐ……」

二人に窘められ、朔羅は口を噤む。

確かに落ち着いてみれば、考えなしの行動が先行し過ぎていた。自覚がなかった訳ではないが、改めて指摘されると何も言い返せない。もともと、絹枝が京太は朝のような事をするほどの悪い人間ではないという話から飛躍しすぎたのだ。結局騒ぎ立てていたのは自分一人だけだと思いついて、だんだん恥ずかしくなってくる。

「でもまあ、いつも鈍いあんたにしてはよく考えた方よね」

「フオローになつてるような、なつてないような!？」

朔羅が涙目でツツコミを入れる間に、『螺旋の環』の店舗が見えてくる。いつもならいの一番にドアを開け放つ朔羅が後ろの方でしよげているため、なぎさがドアを開いた。蘭と挨拶を交わし、今日の一件を報告する。

「……そうか。分かったよ、ありがとう。あとは私に任せてくれればいいよ。君たちは……そうだね、この依頼が片付くまでその扇空寺京太君には関わらない方がいいだろうね」

この件に関してはやはり蘭も同意見だった。ほどなくして『螺旋の環』の閉店作業が始まり、朔羅たちは着替えのために自室に帰っていく。

朔羅は後ろ手に自室のドアを閉めて、背を預ける。

改めて考えてみる。ジョーカーの件は蘭個人への依頼だ。朔羅たちにはその手伝いとして、発見した場合の報告が義務付けられただけで有り体に言えば何もする必要がない。蘭への報告は終わった。後は結果を待つだけだ。

ただ、ジョーカーと京太がもしイコールで繋がるのだとしたら。またいずれ生徒会役員として彼と関わるのを避けられないであろう朔羅は、『螺旋の環』の魔法使いとしての接触を自制できるだろうか。朔羅がどう動くかは水輝の報告次第ではあるが。

今は待つばかりで答えは出ない。ともかく、今日もまた近隣に出

没したという魔の討伐依頼が入っていた筈だ。気持ち切り替えて、
ければ戦闘に支障が出る。深く息を吐いて、朔羅はまず制服を着替
え始めた。

第十話 閉ざされた地下の戦い

空間を遮断するための結界が張られたのを、彼女の眼が捉えた。

彼女の左目は全ての物事の本質を見抜くものだと言われている。

顔も知らない母親のものとは逆の瞳に宿ったそれは、同じ性質を持ちながらも別のものと言えるかも知れなかった。

彼女は「はっ」と吐き捨てる。こんなものがなければ、自分たちは普通の人間として普通の生活を　普通の姉妹として過ごせたのだろう。だから彼女は、自分たちを今の境遇に追いやった両親を許せない。とりわけこんな眼を受け継がせた母親が憎くて仕方がない。そして今、自分が得られなかったものを得ようとしてのうのうと生きている姉も。

「絶対に殺してやる。私が、この手で」

地を蹴り、彼女は夜の闇の中へ飛び込んで行った。

6 .

朔羅が集合のために『螺旋の環』のカウンター前にやってくると、『螺旋の環』のメンバーの他に一人、意外な人物の姿があった。

「あれ、紗悠里さん？」

「どうもこんばんは、風代さん」

深々と丁寧に頭を下げる紗悠里に、朔羅は釣られてお辞儀を返す。先に来ていたなぎさも絹枝も水輝も事情を呑み込んでいるようで、首を傾げているのは朔羅だけのようにだった。

不思議そうな朔羅を見て、蘭が説明する。

「私の実家はある退魔師の一族なんだ。親戚筋である彼女ももちろん退魔師だね。それで彼女に協力を要請したという訳だよ」

退魔師。いつも着物姿でやって来る紗悠里の腰には、ただ一つだけ見慣れないものがあつた。刀だ。それも、まるで詳しくない朔羅でも分かる程の力を持つ代物だ。それを持つに相応しい佇まいに、彼女が退魔師であるというのは充分に納得がいった。

「皆さんのお役に立てるかどうかは分かりませんが……、よろしくお願ひしますね」

畏まつた紗悠里の言葉に、むしろ恐縮するのは朔羅たちの方だった。退魔師と言えば文字通り、魔の討伐のプロだ。朔羅たち魔法使いが今回のような任務に就くのは言つてしまえば彼女ら退魔師の真似事のようなものに過ぎない。ともすればたった一人で朔羅たち四人の能力を賄えるかもしれない程、充分過ぎる戦力の追加だった。

殆どの人間が寝静まつた深夜、人氣のない場所に魔は出没しやす。特に闘争本能を剥き出しにした知性の低い者にその傾向が強く、互いの気配に引き寄せられて集まつた魔どもは互いの存在を食い潰すために戦闘を行う。勝つた者が生き残り、負けた者は死に勝者の糧となる。自然界にも似た法則がそこにはある。故に理性を持たない魔には、獣の姿を象つた者が多い。

朔羅たちが訪れたのは、終電の時間を過ぎて機能を停止した地下鉄駅構内だった。電源の落ちた電灯になぎさが電氣を通すと明かりが灯る。身も凍るような邪悪な気配が立ち込めるそこに、朔羅たちの足音だけが響く。どうやら魔どもが息を潜めているのは地下鉄のホームであるようだ。蘭が張った結界に警戒の色を強めているらしい。獲物とあらば狂戦士の如く暴れ狂う魔どもが、さながら狩人としての顔を見せている。

朔羅たちは慎重にホームへと降り立つた。対面式で、線路は中央を走る形となっているホームだ。するとこれまで何一つ音沙汰を見せなかつた魔どもが突如姿を現した。空間を歪めるかのように黒い

渦が幾つも浮かび上がり、形を変えていく。見る間に朔羅たちの周囲は、カラスや犬の姿を象った魔の群れに包囲されてしまった。

紗悠里以外は何の装備も持たない丸腰のまま敵の包囲網に囚われた朔羅たちに、魔の群れは一斉に攻撃を仕掛ける。牙や爪を剥き出しにした魔どもの奇襲を受け、朔羅たちの姿はあっという間に群れの中へ消えてしまう。

だがしかし、これを一瞬にして退けてしまう仲間が今の朔羅たちにはいた。

きん、と金属のぶつかる音がした瞬間、朔羅たちを取り囲んでいた魔どもが爆ぜるように飛び散り霧散していく。朔羅たちは無傷で健在だった。朔羅が見たのは一閃、紗悠里が刀を抜いて鞘に戻した一瞬の動作による斬撃であった。

「まさか、これで終わりではありませんね？」

彼女らの先頭に立つ紗悠里が、閉じていた双眸を開き顔を上げる。そこにはいつもの穏やかな大和撫子然とした微笑みはなく、一切の容赦を排除した退魔師としての顔があった。

無論これで退くような魔ではない。次から次へと同種の魔が出現し、破られた包囲網を補完していく。

「また囲まれるわよ！ 散開して！」

「了解！」

なぎさの指示により朔羅たちは三手に大きく分かれた。水輝はホームの右手へ、なぎさは左手へ、朔羅と絹枝、紗悠里は線路上へとそれぞれ駆け抜ける。

「マテリアライズ！」

朔羅と水輝の声が重なる。二人の手には一瞬にしてそれぞれの獲物が握られた。

「朔羅ちゃん、後ろは任せて」

絹枝の両手に小さな炎が灯る。野球のボール程度の火球であったが、それを幾つも投げつければ牽制にはなる。戦力として数えるには心許ないものだが、彼女は今日ようやく四大元素魔法を学び始め

たばかりだ。普通ならこのレベルを習得するまでどれだけ早くとも一週間はかかる。目覚ましい進歩と言えた。

絹枝に実戦経験を積ませるように指示したのは蘭だ。これに際し朔羅が絹枝の護衛のような立場で戦う事になったが、最初は絹枝を守るか分からない不安から、水輝かなぎさが適任だと辞退しようとした。だがなぎさの「戦ってればできるようになるんでしょ、先輩」という言葉に反対意見は鎮圧された。確かに朝、自分で言い切った台詞だけに仕方がない。おまけに「お願いします、先輩」とまるで邪気のないおっとりとした瞳で絹枝からも頼まれれば断れる筈もなかった。

「うん、お願い！」

朔羅は処刑鎌を振り回しながら襲い来る魔を屠り、絹枝を連れてホームを対岸へ渡る。紗悠里は線路上に腰を据えて戦う事にしたように、自らは動かずに魔を迎撃する形を取っていた。

朔羅は紗悠里の実力に驚くばかりだった。想像以上の手練れだ。特に初手において、朔羅や水輝がマテリアライズを行うまでもなかった手腕には舌を巻いた。流星は退魔師である。

踊るようなステップを踏みながら、逆側のホームへ降り立った朔羅は、絹枝と背中合わせになって体勢を整えた。彼女らを追ってホームに乗り上げてきた魔の群れが、四方八方から朔羅と絹枝を取り囲む。

カラスの姿をした魔たちが攻撃を開始した。翼をはためかせ、無数の羽を朔羅たち目がけて投げ付けてくる。鋭く尖ったそれはさながらクナイの投擲のようだった。二人はそれを捌き切れずに串刺しにされてしまう。そこへ犬型の魔たちが獲物を捕食する狼のように襲い掛かり、彼女らに噛り付く。

するとあろうことが、朔羅たちの姿は噛み砕かれるまでもなく霧のように消えてしまう。

「こっちだよっ！」

「それっ」

朔羅も絹枝も、その本来の姿は包囲網の外にあった。絹枝が投げつける火球に怯む間に、朔羅は次々と彼らを斬り刻んでいく。朔羅はマテリアライズした鎌を手に、特殊なステップを踏む事で相手に幻覚を見せるといふ幻術の魔法を得意としていた。ホームを渡る間の動作がそれだ。彼女らを追ってきた魔どもは、まんまと朔羅の術中に嵌っていたのだ。

尚も出現しようとする魔の気配を前に、朔羅は新たなステップを開始しようとしていた。

だが突如としてホームに鳴った不自然な音に気を取られてそれを中断してしまった。

「え!？」

「何でこの時間に……!？」

なぎさたちも同様に不信感を露わにしていた。そう、それは電車の到着が近い事を知らせる電子音だった。

白線の内側までお下がりください。

などと合成音によるアナウンスが流れる。するとあるう事か、轟と暗闇の奥から吹き抜ける風と共に電車の走る音が聞こえてくる。ヘッドランプの明かりが見えて益々真実味が増してきた終電後の電車の到着に、線路上にいた紗悠里が急遽なぎさたちがいる方のホームの上に退避する。魔の群れも、ランプの眩しさと不可思議な闖入者の接近に戦闘を中断して警戒を始めた。

警笛の音が鳴り、やがて本当に線路を走る車両がホームに到着する。車両には誰の姿もなく、それどころか運転手さえも不在であった。減速していく電車はこの駅のホームに停まり、ドアが開く。すると朔羅たちの前で開いたドアの奥、誰一人として乗客がいないと思われていた車内に、一人の少女の姿があった。人を刺すような吊り目、人形のような無表情と受ける印象は全く真逆だが、朔羅はその面影がどこか絹枝に似ているような気がした。

「見いつけた」

少女は目を見開いて唇を歓喜に歪めると、懐から銃を抜き放った。その銃口は、絹枝に向けられていた。

余りに理解不能な状況に誰もが身動き一つ取れない中、少女が引き金を引く。朔羅も絹枝もその音に思わず目を瞑った。凶弾は間違いないく絹枝を襲うだろう。

だが、鳴り響いたのは金属同士が激しくぶつかり合う鈍い音だった。その後何かが電車の窓を突き破ったのか、ガラスの割れる破砕音が響く。

硝煙の臭いが立ち込める中、どこかうっすらと煙草の臭いも混じっているような気がした。朔羅はゆっくりと目を開いていく。背にした絹枝はどうやら無事らしい。ただ彼女は、自分と謎の少女の間に立つ人物を前にして戦慄していた。朔羅も、彼を認めて驚愕に目を見開く。

肩越しにこちらを振り返る彼が誰か、見間違える筈はない。

「あなた、は……」

絹枝を救ったのは、あの写真の男、ジョーカーであった。

第十一話 深紅の瞳を持つ鬼

「チツ」

彼女は舌打ちを禁じ得なかった。無論瞬き一つせず一部始終を見つめていた彼女には何が起きたか全て分かっている。

改札口のエリアから飛び降りてきたバイザーの男が、彼女が引き金を引いた瞬間に絹枝の前に降り立ち、鞘に仕舞われたままの刀で銃弾を弾いたのだ。人間離れた絶技だったが、特に魔法を行使した様子は捉えられなかった。純粹に身体能力のみでやってのけたという事か。

彼女は銃を懐に仕舞う。これだけの技を持つ者が相手となると、奇襲に失敗したこちらは数で劣るだけに分が悪い。元々絹枝を殺した瞬間に離脱するつもりだったのだ。一旦引き下がって出直す他ない。ドアが閉まり、アナウンスと共に電車が発車する。運転手もないまま加速する電車は、あつという間にホームを抜けた。窓の向こうには光の閉ざされた漆黒の空間が広がるばかりだ。

「あのクソ親父、あんなのがいるなんて聞いてない」

彼女は乱暴に座席に腰かけ、だらりと足を伸ばす。

銃を撃つた時、絹枝を殺せる確信があった。人を殺せるという実感があつた。あの日初めて自分の力で人を殺した時の快感は忘れられない。それが行為の恐ろしさを塗り替えるための感情であつたとしてもそんな事はどうでもいい。ただ、あの快感を実の姉で味わう事ができるのなら。それは何物にも代えがたい喜びとなるに違いない。

次は確実に殺す。あんたを殺して、私があんたの欲しがってたものを全部壊してやるよ、お姉ちゃん。

やがて次の駅に辿り着いた電車のドアが開く。彼女がそれを降り

ると、魔力の供給を失った車両は明かりを失い完全に闇の中で沈黙した。

1 .

後ずさる絹枝の背が朔羅の背に当たり、彼女は足を止めてそのまま膝から崩れ落ちてしまう。

「絹枝ちゃん！」

絹枝は俯いたまま口許を抑えて震えていた。無理もない。命を落としかけたのだ。ジョーカーが割って入らなければ絹枝どころか朔羅の命すら危うかったかもしれない。

「絹枝ちゃん、大丈夫だよ……！ ほら、ジョーカーさんが助けてくれたから」

朔羅が声をかけても絹枝に反応はない。余程衝撃的だったのだろう。蹲ったまま身動き一つ取ろうとしない。

代わりにか、反応を示したのはジョーカーだった。

「構えな、お嬢ちゃん。でねえと今度は、二人ともあの世行きだ」彼の言葉に朔羅はハッと周りを見回す。戦闘態勢を取り直した魔の群れが朔羅たちを取り囲み始めていた。既に逃げ場はなく、絹枝を守りながら戦う他ない。

じり、と徐々に円を縮めながらにじり寄ってくる魔を前に処刑鎌を構え直しながら、朔羅は今のジョーカーの声を胸中で反駁する。聞き覚えのある声だった。どこだったろうか。

ふと、まるで緊張感のない不敵な態度でジョーカーが口を開く。「ところで、ジョーカーってのは俺の事かい？」

朔羅は周囲の魔に気を配りながら頷く。すると彼はあろう事かにやりと笑みを浮かべてみせる。

「名無しか……。ふ、今の俺にはお似合いだな。気に入ったぜお嬢ちゃん。その名前、使わせてもらおう」

お嬢ちゃん。

かくして、予感確信へ至る。

魔の一体が口火を切った。大型の魔が突撃を始めた瞬間、他の同型の魔もこちらへ駆けてくる。上空からはカラス型の魔たちが牽制の羽を飛ばして、朔羅たちに迎撃の暇を与えまいとする。

朔羅とジョーカーはそれをそれぞれの持つ武器で弾きつつ、絹枝をかばう位置取りで襲い来る大型の魔に対処していく。先程は本能に任せて我先にと無秩序な攻撃を仕掛けてきていた魔たちだったが、どこか統制の取れた動きになりつつあるような気がした。今しがた見せたカラス型と大型の連携も然りだ。そもそもこの戦場に足を踏み入れた時から違和感の塊だった。狩猟本能の表れと言ってしまうえばそれだけなのかもしれないが、今夜のこの魔の群れはどうにも理性的な面が見え隠れしている。

人柱であった扇空寺辰真の死後、力を取り戻し始めている魔。こういった低級な小型の魔たちも、力を取り戻すにつれて本能を抑制し始めているのだろうか。

「このっ……！」

それにしても今日は数が多過ぎる。いや、一度に出てくる量は朔羅の技量からすれば大した事はないのだが、いかんせんとめどなく洪水のように湧き出てくる増援の数が半端ではない。加えて崩れ落ちて動かない絹枝をかばいながらでは、刀も抜かずに立ち回る余裕を見せるジョーカーが隣にいてもいずれは疲弊して追い詰められてしまう。

向かいのホームではなぎさ、水輝、紗悠里がそれぞれ同じように魔の群れに手を焼いている。手を借りるのは不可能に近いだろう。

状況を打開する策が見えない中、朔羅はふと疑問に思う。そもそもジョーカーは何故刀を抜かないのだろうか。

「刀抜かないんですか!？」

思い切って問うてみた。彼に視線を向ける余裕はないが、口はな

んとか開ける。

だが、答えは予想もしない方向から返ってきた。

「抜けねえんだよ、そいつにはな」

声は上階からだった。思わず振り仰げば、エスカレーターの上に一人の少年の姿があった。だが彼を少年と形容していいものか。頭髮を整髪料で逆立てた、まだ幼さの残る顔立ちは今日も見た彼のままだ。だがその身にまとう黒の着流しのような着物と、どこか浮世離れた仙人染みた雰囲気は彼の印象をちぐはぐにしていた。

「扇空寺、君……！」

「ガキ、前を向きな」

思わぬ人物の登場に目を見開いて彼を見ていた朔羅の前に、京太は一足飛びでエスカレーターから降り立つ。そこには丁度、背を見せる朔羅に襲い掛かるうとした犬型の魔が迫っていた。それを蹴り落とし、京太は朔羅を振り返った。

「でねえと、危ねえぞ」

振り返る京太の顔を間近で見て、朔羅は改めて瞠目する。彼の瞳は燃え盛る炎のように真っ赤に染まっていた。普段は黒かったはずなのだが、これは一体どういう事なのだろうか。

「はっ、奴ら本気を出すつもりらしいぜ」

京太の登場に、魔たちは足を止めてホームの奥へと退却して行く。朔羅を取り囲んでいたものたちだけでなく、反対側のホームでなぎさたちと戦っていた魔も同じ場所へ集う。

何事かと訝る朔羅たちを前にして、魔たちは集う仲間をあるう事が食い合い始めた。これまで幾つもの魔と戦ってきた朔羅でも目を背けたくなる程醜い貪り合いの中で、群れは凝縮され一つの形を成す。

それは漆黒の翼を生やした、人間の数倍の巨軀を持つ狼のような化け物だった。合成型、とでも呼んだ方がいいだろうか。朔羅としては初めて見るタイプの魔であった。

「若様！」

線路を渡って紗悠里たちがこちらへ駆けて来る。どうやら京太と紗悠里は知り合いらしく、恭しく頭を下げる紗悠里に対して京太は親しげに声をかける。

「おう、ご苦労だったな紗悠里。でけえ犬が一匹ときやがったが、しばらく遊んでやってな。俺はまずこつちを片付ける」

「はい、お任せください」

紗悠里が合成型の魔と対峙する間に、なぎさと水輝が朔羅と絹枝の元へ駆け寄る。

「絹枝！　しつかりなさい、絹枝！」

強く肩を揺さぶるなぎさの声も届かないのか、絹枝は俯いたままだ。だがなぎさが何かに気付いて絹枝の口許に耳を寄せる。どうやら絹枝は何かを呟いているらしかった。

「……とにかく、まずは絹枝を壁際に。それから玖珂さんを手伝うわよ」

なぎさの指示により、三人で絹枝の身体を階段下の壁際まで寄せた。改めて合成型の魔と対峙しようとした時、朔羅の眼に留まったのは睨み合う京太とジョーカーの二人だった。

「どいてくれねえかな、坊ちゃん。あんたんとこのお嬢ちゃんでも、これがないやああれを倒すのには一苦労するだろうぜ」

ジョーカーの口許に既に笑みはなかった。対する京太もまるで仇敵に相對するかのようには笑みを消してジョーカーと向き合っている。「諦めな。あんたにやそいつは抜けねえよ。それはウチのもんだ。見逃してやるからさっさと返しな」

京太はジョーカーに向けて手を伸ばす。それ、というのはジョーカーの持つ刀の事だろうか。不自然な程にその刀身を鞘から抜き放たないのはそもそも抜けないから、と言うなら確かに納得はいく。刀剣の知識がない朔羅だが、魔法使いとしてならあの刀の持つ強大な力を感じ取れる。それだけに何故力を解放しないのかが疑問で仕方なかった。だが何故抜けないのだろうか。

ジョーカーは柄を握り腰を落とした。手を伸ばす京太と構えを取

るジョーカーがそのまま睨み合う。

だがやがてジョーカーは構えを解いて刀を放り投げた。二人とも朔羅の頭三つ以上は高い長身だったが、それすら軽く越えそうな程の身の丈を持つ刀を京太はしかし片手で軽々と受け止めた。

「上出来だ。そこで大人しく見てな。……紗悠里！」

京太が振り向きざまに呼びかけると、紗悠里は戦闘を中断してホルムの脇に退避する。

新たに正面に立つ事になった京太に目標を変えると、合成型の魔は咆哮を上げ、漆黒の翼をはためかせながら突進する。

「図体がでかくなった所で、やる事が変わらねえなら大した事はねえな」

まっすぐ向かってくる巨軀に、京太はまるで臆した様子を見せない。刀を腰に据え、左手を柄に添える。

「行くぜ『龍伽』。扇空寺京太、推して参る」

京太と合成型が交錯する寸前、京太は刀を抜き放った。全く刃こぼれのない白銀に煌めく美しい刀身が露わになり、合成型の頭部に突き立てられる。瞬間、合成型は動きを止め、黒い霧となって霧散していった。

京太は刀を鞘に納め息を吐く。たったこれだけの動作が相当体力を消耗したようで、大きく呼吸を乱している。

「それが『龍伽』か。ふ、いいもん見せてもらったぜ」

ジョーカーは再び不敵な笑みを湛えると、朔羅たちの元へ歩み寄ってくる。

「……その子を、頼む」

彼はそれだけを言い残して、階段を上り去って行った。

彼は一体何者なのだろう。だがこれではつきりした事がある。京太はジョーカーではなかった。そしてそのジョーカーの素顔を、朔羅は確信していた。

大丈夫かい、お嬢ちゃん。足元には気を付けた方がいいぜ。

あの声は間違いなく、絹枝が転校してきた朝に通学路でぶつかっ

た男性のもだった。

第十二話 『龍伽』

駅構内に巣食う魔の気配がなくなつたのを感じて、蘭は結界を解いた。一番出口で待機している彼女は手摺りに背を預けて星空を見上げていた。

蘭の双眸は星見の眼と呼ばれる特殊な物で、夜空に瞬く星々の煌めきの中に世界の運命が視えると言われている。彼女の祖母、イリス・ウィザースから受け継いだ物だ。最も、彼女はその眼で視たものの多くを語ろうとはしない。占い師を本職とする彼女が人の運命を語る媒介はカードが主だ。

それにしても今夜は来客の多い日だ。蘭の行使した結界は、内側を外界から遮断しその存在を認識させなくするためのものだが、あくまでも一般人を巻き込まないための簡易的なもので、魔道に通じた者ならば見つけ出す事も侵入する事も容易い。今日はそうした来客が二人もあつた。その内の一人が階段を上ってくる。蘭は懐から取り出したトランプのデッキをシャッフルし、一番上のカードをめくる。

「ごきげんよう、なんて挨拶は必要ですか？」

指で挟んだカードの絵柄を見せつける。

「どつちでも構わねえさ。俺はもう、お前の知ってる俺じゃあねえ。それにしてもやっぱりお前か、その名前を俺に付けたのは」

彼はそのカードの中で嗤う死神を見て微笑む。蘭の隣に並んだ彼は、階段の下を振り返る。

「相変わらず、いい弟子を取るなあの人」

「『神隠しの踊り子』」

誰にもなく呟くような蘭の言葉に、彼は血相を変えた様子で蘭を見た。

「いるのか、あの嬢ちゃんたちの中に……!?」

彼の問いにしかし、蘭は答えるつもりもないらしい。ふ、と息を吐いて微笑むばかりでその真意はまるで見えない。

その様子に、彼の方もやがて肩を竦めた。

「まあいいさ。あの人らしいと言えばあの人らしい。……それよりも、あいつを頼むぜ」

「ええ。言われなくても。少なくとも、貴方よりは親身になっているつもりです」

蘭の答えに満足したのか、彼は不敵な笑みを見せて夜の街の中へ消えて行った。

彼が去ってからしばらく待つと、京太を先頭に『螺旋の環』の面々が階段を上がってくる。蘭はそれを拍手と共に出迎えた。

「みんな、ご苦労様」

「おう、蘭姉さんもな」

親しげに微笑み合う蘭と京太を見て、朔羅が蘭に問う。

「姉さんって、蘭さんと扇空寺君って姉弟だったんですか？」

「いや、ただの従姉弟だよ」

それより、と蘭は水輝に支えられて覚束ない足取りで歩く絹枝を見やる。

「絹枝君の具合も悪そうだし、まずは引き上げるとしよう」

2 .

『螺旋の環』に帰って来ると蘭は絹枝に部屋に戻るよう指示し、他の面々を事務所へ集めた。

何とか自分で歩き、会話もできるまでには回復していた絹枝だったが、その表情は酷く辛そうだった。その足取りが転校してきた時の不自然な歩き方に戻っていたのも気がかりだ。彼女がゆっくり休めるかどうか不安だったが、何もしてあげられない自分が朔羅は齒がゆくて仕方なかった。

「どうやら、『龍伽』は無事取り返せたようだね」

「ああ、お陰様で。悪いな、紗悠里から依頼が行ってたみてえだが、取り越し苦労になっちまってよ。……まあどうせ、蘭姉さんならこうなる事あ視えてたんだろ？」

「ふふ、それについては何とも言えないね」

蘭の答えに京太は肩を竦める。二人の会話に蘭と京太が本当に親しい間柄なんだと朔羅は実感する。二人の関係が従姉弟だと聞いた時には驚いたものだが、という事は彼女も扇空寺辰真の孫娘だと気付いた時には更に大きく驚いていた。

隣に立つなぎさはこの煮え切らない調子に相当苛立っているようで、腕組みまでして問うた。

「それで、結局一体どういう事なんですか」

「そう怖え顔すんなって、会長さん。今から説明してやるからよ」
京太は脇に携行していたその、『龍伽』と言うらしい刀を胸元まで掲げて見せる。

「こいつは『龍伽』。扇空寺の家に代々伝わる家宝みてえなもんだ。こいつの力はむしろあんたらの方が詳しいんじゃないかねえかと思うが、この龍伽の地で抜きゃあ斬れないもんはねえ」

龍伽。ここ日夏市の一角にそう呼ばれる地区があり、朔羅たちの通う高校もその名を冠している。かつてこの地を守った龍の伝説に由来する名であり、この地における龍脈とは守護神として眠りについたという龍の事を指す。

土地と同じ名を冠するこの刀の持つ力は朔羅も見た通りだった。名は体を表す。この刀はおそらく、龍伽の地を巡る龍脈そのものなのだ。ひとたび抜き放てば断てぬ物はないという京太の言葉は過言ではないだろう。

「昨日の夜、こいつがあ野郎に盗まれちまってよ。まんまと逃げられちまったが、写真だけは取れたみてえでな。それでウチの連中が探し回ったり、紗悠里がここに依頼を持ち込んだりしたんだ。……ま、結局紗悠里があんたらと討魔に出るって言うのに付いて来て

みりゃあ、当たり前だったって訳だが」

あつけらかんと話す京太に、蘭は溜め息を吐く。

「全く、朝、紗悠里君から話を聞いた時は少なからず驚いたよ。なのに当の持ち主がまるで何とも思っていないとはね」

「ああ。どうせ抜ける奴なんざいやしねえからな。抜けねえんじやあ売り捌く意味もねえ。それでも盗んでいくような奴には、自分がどんだけ下らねえ真似をしてるか思い知らせてやりやあい」

「……そう。その発言はともかく、今回の事情は分かったわ。ところであなたはさっき討魔って言ったわよね。あなたたちは退魔師じゃないの？」

「……ま、あんたらからすりゃあ討魔も退魔も対して変わりやしねえと思うがな。ウチじゃあ自分たちのやってる退魔を討魔と呼んでる。退けるんじやねえ、討つんだ。やつてるこたあ変わらねえかもしれねえが、要は覚悟の問題さ。魔なんて存在を殺し尽くす、つてな」

軽い口調で言っただけのける京太だったが、その物騒な言葉の意味に朔羅はぞっとした。それを抑える意味でも、ずっと気になっていた疑問を口にした。

「そ、そうだ、その刀を抜けないってというのは何でなの？」

この質問に京太は「そうだな、まずは昔話といこうか」と前置きして語り出す。

「かつて何をトチ狂っちゃったのか、人間の女に惚れて人間側に寝返った鬼がいた。そいつはこの地を護る龍と共に魔の大将を倒し、愛した女と子を成していった。それが扇空寺の鬼。俺のご先祖様つて奴だ」

「じゃあ……」

「ああ。俺にもその鬼の血が流れてる。知らなかったか？俺のじいちゃん、扇空寺辰真は扇空寺の鬼と呼ばれてたそうだが、そいつは修羅のように強えて意味じゃねえ。正真正銘、本物の鬼だって意味なんだよ」

京太は再び『龍伽』を胸元に掲げて見せた。

「こいつは鬼と共にこの地を護った龍が姿形を変えたもんでもある。刀に姿を変えた時、こいつは鬼と契約したのさ。鬼の血を継ぐ者だけがこいつを鞘から抜き放てるっていう契約をな」

故に『龍伽』は扇空寺の者にしか抜刀する事はできない。京太の言葉に驚いているのは朔羅となぎさの二人だけのようだった。水輝はやはりこの事を知っているようで、爽やかな微笑を湛えたまま耳を傾けている。

「そう……驚いたわ」

バチツ、と破裂音がしてなぎさの身体から漏電のように電撃がスパークする。

「退魔師のあなた自身が、倒すべき魔だったなんて！」

翳した掌から、高圧電流が光の奔流となつて京太に向けて発射される。その余りの電圧に建物内が一気に停電し、なぎさが放った電撃だけが唯一の光源となる。

普通の人間なら一瞬にして感電死するであろう一撃を前に、京太に臆した様子はない。朔羅には彼の瞳が紅く染まるのが視えていた。それも束の間、電撃が京太を襲う。

だが大型の機械が稼働を止めるかのような音と共に、電撃は姿を消した。何も視えない暗闇の中、指を弾く音がして建物内に電気が戻る。なぎさの魔法だ。

そこには停電する前と全く同じ光景があつた。なぎさの電撃魔法が直撃したはずの京太には怪我一つない。完璧にレジストしてしまつたようだ。水輝の言っていた京太の抗魔力は相当なレベルのものらしい。

なぎさと京太の視線が交錯する。言葉はない。沈黙の中でお互いの発する圧力だけが押し合いを続ける。

やがてなぎさが顔を背けた。背を向けて事務所を後にしようとする。

「済みませんでした、蘭さん。……あなたも、鬼なんですよね。申

し訳ありませんが、しばらくあなたの指示は聞けないかもしれませ
ん。では、お疲れ様です」

ドアを開けて出て行くなぎさを、朔羅は追えなかった。声を掛け
ようと思いはしたが、普段とはまるで違うなぎさの横顔を見た瞬間、
どんな言葉を掛ければいいかが分からなくなってしまった。

「……こいつは、随分と嫌われちまったみてえだな」

京太は肩を竦めて息を吐いた。どうやら突然攻撃を仕掛けられた
事は全く意に介していないらしい。なぎさとは対照的に、京太には
彼女への敵意は見られない。

「穂叢先輩……」

水輝が心配げに扉の外を見ている。その端正な顔は珍しく悲痛に
歪められていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5097z/>

魔法使いになりたいから

2012年1月14日10時46分発行